
EARTH THE END

ディスエグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

EARTH THE END

【Nコード】

N5666H

【作者名】

デイスエグ

【あらすじ】

少しずつ地球を蝕む謎の地震。その地震は時を刻むかのような不思議な地震だった。徐々に明らかになる地震の原因。そこには神が犯した最大の罪があった。この事件に巻き込まれていく光と4人の仲間。友情と愛をテーマにしたSFサバイバル。

1.. 始まりの震動

神はアダムとイヴの2人の人間を造った。

そして神は言った。

『産めよ。増やせよ。』

その言葉通り2人は子をつくった。

その子らもまた育ち、子をつくった。

こうして人間は神の教えを守り続けた：現在まで。

これは神話の話だが、そこに隠された秘密があったとしたら。

ある信者は言った。

「神の秘密：それこそ最大の罪にして最悪の失敗。いずれその代償を払うときがくる。」と。

その代償とは？

神の秘密とは？

2010年12月1日。

ヴーヴーヴー：

携帯のアラームで目が覚める。

「うーん、あと5分。」

ドツドツドツ

誰かが階段を上がってくる。

「光、まだ寝てんの？ さっさと起きな！」

そう言って母がカーテンを開ける。

あまりの眩しさに目を隠す。

「わかったよ！ 今起きるから。」

勢いよく布団から出て、まずは髪をワックスで整える。そしていい感じに決まったら階段を降りて朝飯を食う。

そんな俺の名前は矢吹光^{ヤフキコウ}

高校に通う18歳。大のバスケット好きで夢は世界一の称号っていうよくわかんない夢を持ってる。

「いただきます。」

マイペースでご飯を食べてると母が呆れたように言った。

「早く食べないとさおりちゃん来ちゃうわよ。」

「残念ながらもう来てます。」

「あら、さおりちゃん！」 玄関に立っているショートカットの女の子。

こいつは藍田さおり（アイダサオリ）

俺と同じ18歳で、ご近所ということもあり小さい頃から一緒にいる。

何かとわがまままで泣き虫で面倒なやつ。

「わりーわりー！ 今行くからもうちょい待って。」

「じゃあ先に行ってるよ」

「おい！ちよっと待てつつったろ？行ってきます。」

こんな感じにすぐ反抗する。

駆け足でさおりに追い付く。

「お前ちよっとも待てねえのかよ？」

「あんたがのんびりだからでしょ！たまには私を待ちなさいよね。」

「…努力します。」

「それよりさ、昨日の夜地震あったよね？」

さおりが唐突に言う。

「んあ？知らね、そうなの？」

「結構おっきい地震だったのよ。あんたどんだけ深い眠りについてんの？」

「知らねーんだから仕方ないじゃん。んで、その地震がどーしたの？」

「ニュースで言ってたんだけど、0時00分ジャストに起こったらしいの。それで余震があったりしながら1時ちょうどに止まったらしいの。なんか不思議じゃない？」

「偶然だろ？地震なんてそんなに珍しいもんでもないしな…」

「だって震源地も不明で、全国規模だって話だよ？」

「不明？それはおかしいな？」

「でしょ？」

そんな会話をしているうちに学校に着いた。

ガラッ

教室のドアを開けた。

「おっ今日も夫婦で登校か!!」

ニヤニヤしながら机に座るチャライ感じの男。

こいつは藤沢慶フジサワケイ

俺の親友で、大の女好きな問題児。

見た目はチャライが根はいいやつ。

こいつもガキのころからの付き合いだ。

「どうしてこうもいちやいちゃできんのかねえ…」

「うっせーよ、慶！大体なんでこいつといちゃつかねえといけねえんだよ！」

「はあ？それこっちの台詞だから！」

さおりが反抗気味に言い返してきた。

しばらく続く俺らの口げんかに嫌気がさしたように慶が止めに入る。

「もういいから…」

そこにもう2人やってきた。

「なんだ、また喧嘩してんの？仲良いのか悪いのかわかんないね。」

「喧嘩するほどだから仲いいんじゃないかねえか？」

2人の名前は佐藤美樹サトウミキと高橋里志タカハンサトシ。

美樹はサラサラな長い髪の子で見た目はお嬢様を思わせる。

ただ性格は世話焼きではきはきしたお姉様タイプ。

そのギャップがいいと言う男子が多く、学校のアイドルになってるらしい。

里志は剣道部のキャプテンでしっかりしている慶とは真逆の兄さんタイプのやつ。

頼りがいがあるからいつも5人のまとめ役になってる。

とまあこの5人でいつもつるんでるわけです。

ちなみに席も5人は近く：

「それより昨日の地震すごかったよね!？」

美樹が4人に言う。

「ああ。たしかにすごかったな。あの地震で地割れが各地で起きて朝は交通が大パニックだったらしいな。」

「ナニ？自慢??」

慶が里志に言った。

「どこも自慢になんねーよ。」

「にやはは。言ってみただけ…」

「慶は相変わらずおバカだね。」

美樹が猫を撫でるように言う。

「まっでも、1番おバカはそんな地震にも気付かず眠ってた光のほうだけだね。」

こっちを見ながらさおりが言う。

「・・・」

「マジ!？」

「嘘でしょ!」

「お前スゲーよ。」

3人が声を揃えて言う。

呆れ気味に：

「うっせーよ!!」

ガラッ

「ほら、全員席つけー」

先生がきた。HRだ。

「さっきニュース見たんだが昨日の地震で若干だが、行方不明者が
出てるらしいぞ。ただ不自然な点が多くて地震のせいとは言えない
らしい。」

「行方不明かよ!? そうなれば俺も学校サボれるかな。」

慶がいつも通りアホなことを言う。

「お前みたいな問題児がいなくなるなら先生助かるんだが…」

『ハハハ』

そんな感じで今日の学校が終わった。

「じゃ俺バスケ部行くわ。さおり行くぞ。」

「はい。」

さおりはマネージャーだ。

「じゃ俺は帰るわ。」

部活には入ってない慶はさっさと帰る。

それがあの事件の始まりの日だ。

まだ誰も地球に大きな変化が起きていたとは気付かなかった。

2.. 確実に近づく恐怖。

2010年12月2日。

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴゴ

「うおっ！地震だ。」

ゴゴゴゴゴ

ゴゴ

ゴ…

「おさまったか。」

ふと時計が目に入る。

「えっ!？」

時計の針は0時03分を指していた。

「0時…。偶然…じゃないのか？」

気になって仕方なくなり、さおりに電話してみる。

『もしもし光？今回は起きたんだ。』

「ああ。それよりもこの地震はなんかおかしい。」

『うん。やっぱ私もそう思う。なんか嫌な予感がするの。』

「俺もだ。」

『なんか怖いから今日は寝ちゃうね。おやすみ』

「おう。おやすみ。」

カチャッ

なんなんだ。これは？

自然災害なのか。

誰かが起こしてるような気がしてならない。

地割れ。行方不明者…。

何か関係があるのだろうか。

6時30分。

「はぁあまり眠れなかった。」

「光、起きなさい。」

ガチャッ

「あら、珍しく起きてるのね。地震すごかったわね。」

居間でテレビをつけた。

『おはようございます。まず地震のニュースから。今日0時に起こった地震は夜中の2時まで余震が続きました。各地で地割れが見られ、ここ東京では朝からラッシュアワーになっています。また、地震による事故が相次ぎ現在のところ死者17名、行方不明者は362名となっています。一部では行方不明の理由がわからないケースもあり、何らかの事件に巻き込まれたのでは。という考えも出てきておるようです。…続いてのニュースは……。』

やっぱりおかしい。

「おはようございます。」

「あらさおりちゃん、おはよう！」

「遅かったな。待ちくたびれたぞ。」

「だったらあんたが迎えにきなさいよ。」

「めんどい…」

「はあ：じゃあおばさん、行ってきます。」

「行ってくる！」いつも通り歩くがさおりの元気がないのに気付く。

「おい！大丈夫か？」

「えっ？何？」

「大丈夫か？って聞いてんの。」

「：なんか昨日から胸騒ぎが消えなくて怖いんだよね。でも大丈夫だよ！」

ニコツと笑うが無理してる感じだ。

ぎゅっ

俺はさつとさおりを抱きしめた。

「えっ！？ちよつとなにしてんの？」

「変に気なんか使うなよ！何年一緒にいると思ってんだ！お前のことぐらい嫌でもわかるんだよ。」

「・・・」

「いまさら隠すなよ。不安なら言えよ。怖いなら無理すんなよ。そしたら俺が絶対助けてやる。何があってもお前を守ってやるから。」

おそらくこれから始まる恐怖を本能がわかっていたんだろう。

不思議とそんな言葉がでてきた。

言ったというより言わなければいけない。

そんな感じだった。

「…グスッ…ありがとね。」

さおりからいつもの笑顔と涙が見えた。

学校に着く頃にはいつものさおりに戻っていた。

学校も終わり家に帰った。部屋のベットに横になり、考え込んでいた。

気掛かりなことがもう一つある。

時間だ。昨日は0時から1時ちょうど、今日は0時から2時ちょうど。

時間が1時間ずつ増えている。

考えすぎか？

考えすぎではなかった。

その後3日、4日も同じように地震が起き、やはり、1時間ずつ終わる時間が延びていた。

そしてそれに比例するかのように行方不明者は増えていった。

3..それぞれの想い

2010年12月5日

キンコンカーンコン

「光、テレビみたか？」

里志が話しかけてきた。

「いや、どうした？」

「昨日の特番でやっていたんだが、地震後の映像を一般人から入手したらいいんだ。その内容がな、地震後に地割れが起きる。その地割れからなんか不気味な生物が出てきて、近くにいた人をその地割れの中に引きずり落としたらしい。」

「生物？」

「ああ、暗くてよく写ってないんだが人ではない生き物だった。ただ一般人の投稿だからヤラセって話もある。でも、」

「でも本当なら地震の起こるタイミングも行方不明も説明がつく！って言いたいんだろ？」

「その通りだ。光はどう思う？」

「たしかに説明がつくけどそれだけじゃ信用はできないな。」

「やっぱりそうか？テレビもそうだった。」 「でも本当なら…」
2人は言葉を失った。

そこに明るく飛び込んできた慶。

「らしくねーぞ！2人してじいさんみてーに老けちまってよ。わかんねえならわかんねえでいいじゃねえか。」

「プッ」

「ククク…」

「なんだよてめえら！？」

「いや、慶に元気付けられるとは思わなかったから」
「同感だ。」

慶に励まされて不思議とすっきりした。

「そうだよな！わかんねえことで悩んでも仕方ねえよな。」

それに俺はさおりを守らなくちゃならない。

そんな弱気であいつを守るわけねえもんな。

助かったぜ慶。

心の中でそう思いながら一人で笑ってしまった。

「おい！いつまで笑ってんだよ！」

「わるい、もう平気だ。」

女子更衣室内。

「ねえ美樹。」

「ん？どうしたの、さおり。」

「もしだよ？もし、男の人が美樹を心配して抱きしめてくれたらその人を好きになる？」

「はあ？なにそれ！？」

「だからもしもの話。」

「んゝ。私はならないと思う。だって心配してくれるにしても、抱

きしめるって…恋人でもあるまいし。」

「そうなのかな。」

「でも、ずっと気になってたやつが心配して抱きしめてくれたら、私この人のこと好きだったんだって気がつくことはあると思う。」

「えっ!?!」

「光に抱きしめられたんでしょ?」

「えっ。ちよっと、な、なんで。」

「さおりすぐ顔にでるもん。わかるよ。」

「……私光のこと好きなのかなあ。昔っからあいつといると変にモヤモヤして、喧嘩するとすごい不安になって、ずっと違うって思ってたんだけど、抱きしめたらとき、すごく嬉しかったの。」

「それが恋なんだよ。」

「うん。……光は私のことどう思ってたのかなあ…」

「さあ、あいつ謎めいてるからなあ…」

教室内。「なあ光。」

「ん?」

慶が真剣そうに聞いてきた。

「今女子2人いないから聞くけどさ、お前ってさおりのこと好きなの?」

「あ?なんだよいきなり!」

「俺もそれ前から気になってた。」

里志も混じって聞いてくる。

「どうなんだよ!？」

「どうって、普通だよ。好きでも嫌いでもない。」

「じゃあなんであんなにあいつにかまうわけ？」

「かまってんじゃねえよ。なんかほっとけねえんだよ…あいつ。辛いの無理して頑張ったり、前なんて一人でバスケットの仕事全部やろうとしてオーバーワークで倒れたんだよ。そんなやつだから心配なんだ。」

「ふーん…」

「まっそうゆうことにしといてやろうか！」

里志が言った。

「俺のことよりお前らはどうなんだよ？」

「俺は一人の女とは長く付き合えねえからな。里志は？」

「俺はいねえよ」

「何だよ、隠すなよ。」

里志はしばらく沈黙した後、重い口を開いた。

「実は…美樹のことが……な。」

「だろうと思ったよ。」

「確かに！」

「2人ともわかったのか？」

「いつも一緒にいたからな…。」

「まっこれで、光はさおり、里志は美樹ってのがわかったわけだ。」

「俺は違うっての！」

なんて会話を俺達は楽しんでた。

それぞれ考えることはたくさんある。

俺はたださおりを守りたい。そのためならなんでもしてやる。
あいつのことが・・・好きだから。

4..突然のサバイバル

2010年12月6日5時40分。

「キャー！！！！助けてー！！！」

女性の悲鳴が聞こえ、目が覚めた。

シャツ

カーテンを開ける。

外は薄明るい感じで妙に暗くて不気味だった。

「さっきの悲鳴は…？」

ふと2階から下を見る。

だんだんと目が覚めてきて視界がはっきりしてきた。

「うわああああ！！！！」

そこに見えたのはおびただしい量の血と道路に横たわる女性の死体だった。

思わずしゃがみ込む。

「ハアハアハアハア。」

あまりの恐怖に呼吸が乱れる。

恐る恐る覗いてみる。

やはり死体はそこにあった。
な、何で人が死んでるんだ？
さっき叫んでた人か！？

ガサッ

「ん！？」

今その木が揺れたような…。

ガサッガサガサ、ドスッ。

そこから出てきたのはどす黒いぬるぬるした生き物だった。後ろ姿は人のように見えた

「何だあれは？後ろ姿でよくわからない。人か？」
だが次の瞬間、背筋が凍り付いた。

とてつもなく長い舌が、死んでいる女性に巻き付き、まるでロープで引っ張るかのように引きずっていったのだ。

「なっ…」

動揺して言葉がでない。

人間じゃない：

あれは間違いなく人間じゃない。

パキッ

後ずさりする際床にあったCDを踏んでしまった。

バツとその生き物がこちらを見る。

「ぎいああああ」

「うわああああ！！！！」

生き物の顔は骸骨に薄い皮が張ってあるだけのような醜い化け物だった。

気付かれた！？

どうすればいい？

どうすれば？

窓をみると化け物は塀に登りまっすぐこっちを見ていた。

「に、逃げないと……。」「

しかし、足がすくんで思うように動かない。

「動け！動けよ！！頼むから……」

ズル…ズル…

手を使って床をはって歩く。

「はぁはぁはぁ…」

恐怖とパニックでただ遠くに逃げることしか浮かばなかった。

ガッシャーン！！

化け物が窓を破って入ってきた。

「がぁぁぁぁ！！！！」

「うわぁぁぁ！！！！くんじゃねえよ化け物が！！！！」

長い舌を出しながら少しずつ向かってくる。

「ヒィ…ヒィ…」

恐怖で呼吸すら出来ない。

もうだめだ…殺される。

死を覚悟し目を閉じる！

その瞬間！

ゴーン・・・
ゴーン・・・
ゴーン・・・

鐘の音が聞こえた。

何だ？

鐘？

「キシヤアアア！！！」

ドットツドットダシャン。

化け物は逃げるかのように出て行った。

ゴゴゴゴゴゴ
ゴゴゴゴゴゴ

ゴゴゴ
ゴゴゴ

………

じ、地震!?

地震が静かに止んだ。

「はあはあはあはあ…、ふうふう………ふう。」

しだいに呼吸も戻る。

バツと振り返り時計を見る。

「6時…。」

家族は無事なのか?

急いで階段を降りて部屋を見る。

「い、いない…」

周りに人の気配はない。

「母さん、父さん!?’」

・・・

「そんな…」

地面に膝をつき、頭をよぎる最悪の考えを振り払っていた。
すると頭に浮かんだのはさおりだった。

「さおり!!」

携帯を取り出しさおりにかける。

『……………』

「頼む!出してくれ。」

『……………光!?光なの?』

「さおり!!無事か?」

『私は平気なんだけど、家族がいないの。それに周りが血だらけで
…助けてよ光。怖いよ…助けてよ…』

「すぐ行く。だから待ってろ。いいな?何も考えるな。待ってろよ
!?!」

プチッ

服を着替え、何か武器はないか探す。
あの化け物がまだいるかもしれない。念のために何か身を守るもの
がほしかった。

「ん?これなら…」

里志からもらった木刀だ。たくさんあるからと俺に無理矢理渡したやつだ。

木刀を手を持ちさおりの家に向かう。

外は明るくなっていた。
先程の死体が目につく。

あの化け物にやられたのだろう。
周囲を気にしながらゆっくり歩いて向かった。

「さおり!？」
家に入るとさおりが布団に包まって怯えていた。

「光・・・何があったの。」

「わかんねえ。俺が見たのは黒い化け物だ。」

「それって:」

「ああ。里志も言ってた生物だろう。俺もやられるところだった。」
「じゃあまだこの辺にいてること?」

「いや、少なくともこの辺にはいないみたいだ。いきなり、逃げるように出て行ったからな。」

「.....」
「.....」

「テレビつけてくれ。ニュースでやってるはずだ。」
ピッ

『全国各地で謎の生物に襲撃される事件が起きました。詳しい情報は入っていませんが、死者は1万人にのぼることです。この事件を受け、緊急事態警報が発令され、自衛隊の配備。緊急対策本部が設置され国民には避難勧告が出ています。自衛隊の指示に従い避難を開始してください。』

「やっぱり全国で起こってるみたいだ。俺らも避難しよう。」
「・・・うん。」

「大丈夫だよ！さおりん家の親も避難してるよ！！」
「そうだよね…行こう。」

人通りの多いメインストリートに出れば自衛隊もいるはずだ。
2人はメインストリートに向かった。

「何だ・・・これ！！」

メインストリートについた2人の前には地震で崩れたビルの残骸、車の山、そして、人の死体があった。

「・・・うっ！！」

死体を見たさおりは具合が悪くなったみたいだった。

俺はそつとさおりの目を手でおさえた。

「見なくていい。目をつぶってろ。俺が先導してやるから。」

しばらくさおりの手を握りながら先導して歩いていると広場が見えてきた。

広場に着くと多くの人（生存者と言ってもいいかもしれない）がいて、自衛官が住民に説明をしているようだった。

横にあったベンチにさおりを座らせ、説明を聞きに向かった。

「ですから、今日はもう安全なんです！！だからみなさん食料を確保して各自隠れるところを探してください。」

自衛隊の指揮官だろうか？胸にバッチを多く付けた人が話している。「隠れろってどうゆうことだよ！？おまえら自衛隊が俺らを守るんじゃないのかよ！！」

「そーよ。あんたらはそのために税金から給料もらってるんでしょ？それが自分で何とかしろ？ふざけないでちょうだい！！」

「ですから、軍の防衛施設は人が多すぎてもう入れないんです。我々がパトロールしますから安全です。」

「人が死んでいるのに安全な訳無いだろうが！！」

「そーだ」

「ふざけるな！！」

がやがや

がやがや

住民の怒りが爆発している。このままここにいたらまずいな。

人込みを抜けさおりの元に向かう。

「大丈夫か？さおり。」

「だいぶ良くなったよ。それよりどうゆう感じなの？」

「施設が満員で自分達で生き延びてくれ！だとさ。」

「・・・どうすんの？」

「ここにいっても仕方ねえ。とりあえず今は化け物が出ないらしいからどこか隠れ家を探そう。歩けるか？」

「平気だって。それより、何で今は平気だってわかんのかなあ？」

「わかんねえ、今は聞ける状況じゃねえし、信じるしかねーよ。」

「あれ！？光とさおりじゃねーか？」

広場を出る寸前に誰かに声をかけられた。

「慶！！」

「慶！？」

「よう！久しぶり？」

こんなときでも相変わらずだ。

「おまえらも無事だったか！？」

里志と美樹がやってきた。

「さおりー！！無事でよかった。」

美樹がさおりに抱き着く。

「俺も無事なんだけど…」
ぽそつと呟く。

「よかったねえ光！」

美樹が軽く流した。

こいつらといるとさっきまで死にかけてたのが嘘みたいだ。

里志が咳ばらいをする。

「これから隠れ家を探すんだ。一緒に行かないか？」

「あたりめーじゃん！！俺らは5人で1つだろ？」

慶が自信満々で言った。

「光みたいは無鉄砲なやつを置いてけるわけないしね。」

「助け合いこそ武士の掟」
！？

里志が珍しくボケたのでみんな驚いた。

なんか古いけど・・・

こうしておれらは再開を果たし、生き残るため行動を始めた。

5..すれ違いとスタートライン

「で、どこに行く？」

里志が聞いた。

「うーん：見つかりにくい場所がいいよね。」

4人が悩んでいると慶が言った。

「学校でいいじゃん。」

「何で学校なんだ？」

「だってよ、学校なら広いから隠れやすいじゃん。

食堂、自動販売機、売店で食料もらえるし、貯水もしてるから風呂にも入れるだろ？」

「……いいかもしれない。」

「たしかに。」

4人とも納得した。

でも慶のアイデアってのがなあ：

「おい！？おまえ今慶のくせにとか思ったろ？」
俺を見ながら慶が言う。

「な、なぜわかった？」

「わざとらしい!!」

つか、おまえすぐ顔に出るんだよ!!」

「じゃ学校に行くぞ!!」

里志が先頭で行く。

やっぱ頼りになるなあ

とか思いながら何となくさおりが目に入った。

さおりもこっちに気づき、ニコッと優しい笑顔を見せてきた。
思わずドキッとしてしまった。

くそ……

やっぱあいつかわいいじゃん。

……さおりは俺のことどう思ってるのかなあ……

「着いたな……」

高校前に到着した。

見るかぎり……誰もいないようだ。

「よし、中に入ろう。」

ガチャッ

中は薄暗かく、不気味な感じだった。

電気をつけないとこんなに違うんだなと思った。

「なんか……怖い。」

さおりが怯えている。

…仕方ない。

元氣付けてやろう。

「さお……」

「何ビビってんの、さおり。いつものさおりらしくないじゃん。元気だせ!!」

美樹が言った。

美樹の言葉に元気になるさおり。

「美樹……。そうだね！！こんなんじゃ先持たないよね……。よし！もう大丈夫。」

美樹に先を越された。

なんか恥ずかしくなって俺は肩を落とした。するとさおりに肩を叩かれた。

「何で光まで落ち込んでんの？元気出しなよ！」

「うっせー！！」

誰のせいだと思ってんだよ。

「ところでどこに入る？」美樹が聞いた。

「決まってんじゃん。」

真っ先に慶が言った。

「女子更衣室。」

「この変態！！！！」
美樹がキレた。

俺がハッとひらめいた。

「宿直室は？」

宿直室はなんかあったとき先生たちが泊まる場所。

「いいんじゃないか！？」
里志も賛同する。

宿直室に向かうことにした。

偶然にも宿直室は2階の物置の隣に目立たない感じであった。

「俺天才？」

「光、なんか言った？」

美樹がキレ気味に言う。

「いや、何も。」

ガラッ

中は意外と広く、
キッチン、テレビ、テーブルに布団と必要な物が揃っていた。

「やっぱ俺天才？」

「なんか言った!？」

また美樹が言う。

「な、何も…」

中に入り、テーブルを囲んで会議を始める。

議長役は里志。

「えっと、決めることはこのあと何をするか。」

「1時間休みたい。」

慶の提案？

「食料集めようよ。近くのスーパーから缶詰とか集めないと。」
美樹の提案。

「武器探さない？なんか手元になれば安心できるし。」
さおりの提案。

「アニメとかであるように空き缶を紐でつなげてセンサーみたいにする。」

光の提案。

里志が言った。

「じゃあまとめると…」

まとめれんのかなあと思った。

「1時間休憩したあと、チームごとに行動する。食料班2名、武器班2名、バリケード班1名。」

一瞬でまとめた里志にびっくりした。

「じゃあ私と里志で武器集めるからさおりと光は食料お願いね？」
美樹が笑顔で言った。

「あ、ああ…」

「わかった。」

2人は動揺しながら言った。

それと同じく、

人一倍動揺している男が1人。

里志だ。

「……つと、俺は美樹と武器集めだな。よし、頑張るぜ!!」

美樹は困惑した。

「え、ああ…頑張ろうね。」

完全に里志が空回りしていた。

慶が言った。

「つーか俺一人かよ!!」

4人が声を揃えて言う。

「ファイト。」

12時00分

スーパ―に向かう光とさおり。

「・・・。」

「・・・。」

突然の2人きりに何を話していいかわからなかった。

「なあ…」

「ねえ…」

お互い声がかぶる。

「あっ…ごめん。何？」
さおりが謝る。

「いや、たいした事じゃない。そっちは何？」

「え…あの…、光って好きな…人いる？」

「えっ？」

いきなり、すごい質問が来て驚いた。

実は光も同じ質問をしようとしていたのだ。

「いるの？」

さおりがさらに攻める。

「…い、いないよ!!」

正直には言えなかった。

さおりが好きだと言って今の関係が崩れるのが怖かった。

「…そう。」

「さおりは？」

「私もない。」

さおりは笑顔で答えた。

それからさおりは無言だった。

気まずい雰囲気のほか、2人は食料を集め学校へ戻った。

「おかえり〜!」

玄関で待っていたのだろう。

美樹がお出迎え。

「ああただいま。」

2人の暗い空気を感じたのか美樹はおとなしくなった。

「どうか…した?」

「えっ!?! いや…」

俺が動揺してるとさおりがサラっと言った。

「ううん。何もなかったよ。」

そう言ってさおりは先に行ってしまった。

「あんたなんかしたの?」

美樹が言った。

少し考えてから光は言った。

「……よくわかんねえんだ。」

宿直室に入るとご機嫌な里志とぐったりした慶がいた。

「おつかれ!!」

里志が言った。

「ああ。おつかれ」

部屋にはいろんな物が置いてあった。

木刀、日本刀、バット、釘打ち機など、主に武器。

「こんなによく集めたなあ…。」

「あちこち回って集めたんだ。」

里志が楽しそうに言った。

「慶の作った空き缶バリケードもみてきたよ。」

慶がムクツと起き上がり言った。

「つかバリケード班1人っておかしいだろ!?!」

「ああ。おまえだから出来たんだ。よくやったよ……なあ里志？」

「その通り。」

2人は褒めてごまかした。

「納得いかねえ。」

16時00分

食事やら入浴をすませ、ふたたび会議を開く。

里志が言う。

「あの化け物は明日の地震で出来た地割れから出て来るはずだ。だから今日は、後眠り明日に備えてほしい。」

「なんか怖くなってきたな。」

慶が、恐怖を予知したかのように重く言った。

そりゃそうだ。

俺だって今日奴らが人を殺すところを見てる。
恐怖を感じずにはいられないさ。
でも、向き合わないと恐怖には勝てない。

「必ず…全員で明日を生き抜こう!!」
俺は気合いを込めて皆に言った。

「光。」

美樹が言う。

「なに？」

「さおりのこと頼んだわよ。」

「ああ、わかってる。」

そういつてさおりを見る。

さおりも気付き、目が合うのだが、さおりはすぐに目をそらした。

「じゃ寝るぞ。目覚ましを23時にしとけよ。」
里志が言って寝た。

皆が寝るなか光は寝れなかった。
さおりのことが気になっていた。

あいつが俺を避けていても俺はあいつを守らないといけない。

でも…あいつに嫌われるのがこんなに辛いとはな。

それぞれ明日への思いは違うが、同じことが一つある。

それは生きたいという思い。

謎の生き物との生死かけた戦いに巻き込まれた5人。

彼らはようやく戦いのスタートラインに立つことができたのだった。

6..新しい仲間と波乱の予感

12月6日23時00分

ピッピッピッピッ

5人は目を覚ます。

「いよいよか…。」

緊張で全員沈黙していた。

「地震が来たら電気を消すぞ。懐中電灯は持ってるな？」

「ああ、でも月がよく出ていて結構明るいな。」

「窓開けんなよ、寒くなるから。」
変なところを気にする慶。

12月7日0時00分

ゴゴゴゴゴ!!

ゴゴゴゴゴ!!!!!

ゴゴゴ!!!

「くるぞ!」

・・・。

「あれ? 静かだね。」

5人は何となくホッとしてしまった。

その時遠くから音が響いた。

ドガガガガ!!!!!!

パン！！パン！！

ドガガガ！！！！

「広場のほうから聞こえる。おそらく自衛隊が銃撃している音だ。」

「やっぱりいるんだね…」

さおりが悲しそうに言った。

光はさおりの元に行き声をかけた。

「大丈夫だ、さおりは俺が守る。」

「いーよ！！」

さおりから返ってきたのは冷たい一言だった。

「なんだよそれ！？」

そんな言い方ないだろう？」

感情的になり、きつく言ってしまった。

「友達としか思っていないくせに思わせぶりなことしないで！！」

さおりも感情的になる。

「なんだよそれ…意味わかんねえよ!!」

「おい、静かにしろ。
感情的になるのもわかるが今はおとなしくしてろ。
見つかりたいのか!？」

里志が注意した。

「……。」

その時近くで声がした。

「キャー!!! た、たすけて〜。」

里志と光が窓から外を見る。

「あそこだ!!!」

校庭を逃げる女性の姿

そしてそれを追うあの化け物がいた。

「くそっ!!!」

光が急いで部屋を出ようとした。

「おい光!? 待て危険だ!!」

里志が止める。

「だからってほっとけねえよ。

前にも似たようなことがあったけど、前は怖じけづいて見殺しにしまった。もう誰かが死ぬのを黙ってみてんのはごめんだ!!」

里志の手を振り払い光が部屋を出た。

「あいつ一人じゃ危険だ。俺も行ってくる。」

里志がそう言った。

「俺も行く。」

慶も言った。

「いや、おまえは女子2人を守れ!!」

「わかった。」

里志が木刀を持ち、部屋を出た。

残された3人は黙っていた。

ただ、さおりだけは目に涙を流し後悔していた。

「何であんな事言っちゃったんだろ……。好きなのに……。辛いよ……。」

光は校庭へと走っていた。

どこだ？

辺りを見回す。

「いた！！」

30メートルほど先に追い詰められた女性と化け物の姿があった。

まだ間に合う！！

そう考え全力で走る。

「うおおおおお！！！！！！」

手に持っていた木刀を構える。

「ギィ!？」化け物がこちらに気付くと同時に木刀をおもいつきり振り落とした。

「くらえ!!!」

ゴツッ!!!!!!

鈍い音が聞こえ、化け物が倒れた。

やったか!？

化け物は動かない。

倒したことを確認し、肩の力を抜く。

「大丈夫か？」

女性を心配する。

「は、はい!!大丈夫です。あの……ありがとうございます。」

そういうと女性は泣き出した。

よほど怖かったのだろう。

光はそっと女性の肩に手を置いて慰めた。

ゾクッ!!!

後ろに嫌な気配を感じた。

振り向くと倒したはずの化け物が起き上がっていた。

「くっ！！！」

木刀に手をかける。

ダメだ…間に合わない。
やられる…。

「伏せろ！！！」

里志の声が聞こえた。

その声に反応し、バツと地面に伏せた。

次の瞬間、

里志の突きが化け物の首に刺さった。

黒い血を出して化け物は倒れた。

今度こそ死んだようだ。

ため息を一つはいて里志が言った。

「まったく…呑気に女の子を慰めてるからだよ。」

「うるせー！倒したと思ったんだよ。」

それにしてもすごい突きだったな！？
さすが剣道部主将だな。」

「感心してないで戻るぞ。いくら月夜で明るくてもここは目立ちすぎる。」

「わかった。歩けるか？」

女性を心配する。

女性はコクツと頷いた。

2時15分宿直室内

「あの…危ないところを助けてもらってありがとうございます。」

しばらく休んで落ち着いたのだろう。

女性が5人にお礼を言った。

「気にしないでいいよ。それにお礼ならこいつに言って？
真っ先に飛び出していったのこいつだから…。」

里志が光の肩を叩いて言った。

「えっ…あの…ありがとうございます。」
女性は慌てた様子で光にお辞儀する。

「お礼はもういいよ。」

俺は矢吹光、よろしく!!」

「私は芳賀ハガミズキ美月です。」

そう言って2人は握手した。

「んで、さっき喋ったこいつが高橋里志、俺らのリーダー。」

「よろしく!!」

「そこに座ってる金髪のやつが藤沢慶、まあ問題児?」

「よろしく!! 美月ちゃん。」

「次にその長い髪性格きついのが佐藤美樹。」

「一言多いよ!! よろしくね。」

「んでその無表情のやつが藍田さおり、俺の…幼なじみ。」

「……よろしくね。」

「つとまあ、この5人でやってる。」

「皆さんよろしくお願いします。」

美月は会釈した。

「美月ちゃんて何歳？」

美樹が聞く。

「17です。高校2年生の。」

「えっ？じゃあ同じじゃん。私たちも高2。だから気を使わないで普通でいいよ。」

「は、はい。徐々にそうしていきます。」

そのあと美月のことをいろいろ聞いて時間を潰した。

「空き缶も鳴らないし化け物も遠くに行っちゃったのかな？」
里志が外を見ながら言った。

時計を覗くともう5時を回っていた。

慶が積極的に美月に話しかけている。
どうやら美月のことが気に入ったようだ。

「さて、外も明るくなってきたし、里志、校内見回りに行かねえか。」
光が言った。

「ああわかった！」

2人が部屋を出ようと立ち上がった。

「ちょっと待って!？」
さおりが呼び止めた。

「あの…里志の代わりに私が光と行っていい？」

2人を仲直りさせたい里志は、2つ返事でOKした。
2人が部屋を出て、見回りに行った。

「まったく、世話が焼ける奴らだ。」
里志が言った。

「ねえ2人って付き合ってたの？」
みんなとも親しくなった美月が3人に尋ねる。

「付き合っては…いないね。まあさおりは光のことが好きなんだけ

ど、光がよくわかんないのよね。」
美樹がぶっちゃける。

「俺らも光が誰を好きかはよくわかんねー。」
慶が話す。

「そう…なんだ。」

美月が疑問に残る答え方をした。

「それがどうかした？」
すかさず里志が聞く。

「いや…なんでもないの。」

7..きらめく恋心。

「.....」

「.....」

校内を見回る光とさおり。

しかしどちらも会話は無い。

光は、さおりが何で一緒に行くと言ったのかわからず混乱し、さおりもまた、美月に優しい光に焦りを感じ、勢いで来てしまったからだ。

「：なあ？何で急に來るって言い出したんだ？」

光が思い切って聞いてみた。

「べ、別に何だっていいでしょ！？」

さおりは慌てて答えた。

さおりの様子を見て、光は正直に聞いてみた。

「なあ：昨日からずっと何で怒ってたんだ？」

「光が鈍感だからだよ：」 さおりがボソッと喋った。

「えっ！？何て言った？」

「別に！！あんたが呑気だからイラッとしてただけよ！！！」
さおりが顔を赤らめながら言った。

「そっか。じゃあもう怒ってないんだな？」
光が笑顔で聞く。

「お、怒ってない……けど。」
まださおりは顔が赤い。

「そうか!! よかった。」
光は笑顔で言った。

見回りが済んだ頃、辺りはすっかり朝だった。

ガラッ

「見回り終わりました。」
「終わりました!!」

仲直りした2人を見て里志と美樹は安心した。

「ご苦労さん」

その直後終わりを告げる地震が起きる。

ゴゴゴゴゴ！！！！
ゴゴゴ！！！！

「7時か…。」里志が言った。

「一先ず今日は安心か。」

慶がふうつと安堵の表情を見せる。

「このあとはどうする？」

光が里志に聞いた。

すると慶が割り込んで喋る。

「まず朝飯食おうぜ！？」

「さんせい！！！」

女子3人が元気になる。

女子が朝飯を作る。

その間男子は今日の作戦を考えていた。

光が自分の考えを話す。

「広場に行ってみねえか？情報収集したり、自衛隊の武器が置いてあるかもしれない！！！」

「決定だ。」

広場に行くことになった。

「お待たせー!!」

スーパ―に行ったばかりとあつて豪華な料理だ。
とても朝飯とは思えない。

全員でご飯を食べ広場に向かう。

12月8日9時02分広場。

「な、何だよこれ!!?」

全員言葉を失った。

昨日の賑やかさなど嘘のような荒れ果てた広場がそこにあった。
化け物の死体と自衛隊の死体。
大破した戦車、散乱した銃の薬莢、木々も焼けこげていた。
まるで戦争の跡地のように……

「女子は向こうを向いてろ!!」

光が気にかけて言った。

同じことが前にもあったからだ。

「やっぱ夜の銃撃はここからだ。かなり激戦だったようだな…」

冷静な里志に対し慶はパニックになっていた。

「てゆーかこいつら何匹いやがんだ!？」

死体を見る限り30匹はいる。

「情報収集は出来そうにないな…」

「それより、一般市民はどこだ？」
光が気になった。

すると美月が話し出した。

「私、ここから逃げて来たの。寝てたら急に銃の音が聞こえて…気が付いたら夢中で走ってた。

たぶん他の人も逃げたんだと思う。

それかあいつらに……」

「それ以上はいい!!」

光が叫んだ。

「ごめん……さおりが怯えるから…それ以上はいい。」

そう言って光は地面に落ちていた拳銃を取った。

カシュッ

銃をスライドさせ構える。

カチャッ

「まだ使えるな……」

「銃に詳しいのか？」

里志が聞いた。

「映画オタクでね…この手のものは扱えると思う。」

まさか光も、こんなところで無駄な知識が生かされるとは思わなかっただろう。

その後光を中心に武器を集め、一度学校に戻った。

ガチャッ

「ふう…重かった!!」

慶が持っていた四角いケースを床に置く。

「慶がそれを見つけてよかったよ!!」

中にはセンチリー銃（設置するだけで、敵を撃ってくれる自動式銃

器)が入っていた。

「こいつは役に立つ…」

「映画ってそんなに詳しいのか？」
里志が聞く。

「ああ、エイリアン2で使っていた。」

「へえ…」

5人はそれとなく流した。

ハンドガン10丁、ライフル5つ、手榴弾8個セットが2ケース、
ナイフ6つ、センチリー銃2機、それと大量のマガジン。

「これだけ集まれば十分だろ？」

「確かに…」

12時00分

昼食を早めに食べ、

それぞれが自由な時間を過ごす。

さおりはキョロキョロしている。
光を探しているようだ。

「もう…どこいっちゃったんだろ？」

その頃光は屋上にいた。

この短期間でいろんなことがありすぎて疲れたため、風に当たって、無心でいようと思ったのだ。

「はぁ…ここはいいな！！気が落ち着く。」

光は床に寝転んで目をつぶった。

風の音が聞こえる。

いつもと同じ風なのに、こんなに心地良いとは。

ザッ

誰かが光の目の前に立った。

光は目を開けた。

「よっ！！」

そこにいたのは美月だった。

「パンツ見えてるぞ！！」

「見ないでよ…」

2人は屋上の壁に背中をつけ座った。

「どうかしたのか!？」

光が美月に聞く。

「いや、ただ風に当たりたかっただけ。」

美月が笑った。

「あっ!？さっきはごめんな、叫んだりして…」

光は広場でのことを謝った。

「大丈夫、気にしてない。それより…光君はさおりちゃんのことどう思ってたんの？」

美月が聞いた。

「え? 何だいきなり…」

「だってあの時さおりちゃんが怯えるから止めさせたんでしょ? そこまでするんだから特別な感情があるのかなって思ってた。」

「……それはその…あいつが悲しむところは見たくないってゆーか、特別な存在なんだ!! さおりは。」

光がそう言ったときだった。

チュッ

美月は光の頬にキスをした。

「なっ!?!」

光は驚き、焦る。

美月は少し照れながら言った。

「光君にとってさおりちゃんが特別であるように、私にとって光君は特別な人なの…」

そう言って美月は、走って屋上を降りて言った。

「えっ? 今の…告白?」

光は頭が混乱した。

「……どう…したらいいんだろう。」

考え事をしながら宿直室に戻る光。
途中でさおりに見つかった。

「あゝ、やっといた!!
どこ行ってたの?」

さおりは汗だくだった。

「屋上だよ。そんなに汗かくまで探してたのか？」

「え、まあ…ね。」

やっぱり俺が好きなのはさおりだ。

そのことに嘘はない。

なのに、後ろめたい気持ちができるのは何故なんだ？

「どうかした？」

反応がない光を心配したさおりが聞く。

「なんでもないよ。」

ニコツと笑う光。顔が引き攣ってるのが自分でもわかった。

どうして恋愛って難しいんだろう！！

悩みが尽きる事なく出てくる。

宿直室に戻った2人。

中には全員いた。

美月と目が合って光は思わず目をそらす。

気まずい……

その様子を見たさおりは、またしても不安を感じるのだった。

18時20分宿直室

夕食をすませ、順番に風呂に入る。

「ふう、さっぱりした！」

1番に入った美樹が宿直室に戻って来た。

さおりが言う。

「じゃあ次は私が入るね！」

「あっ待ってさおりちゃん。一緒に入る？」
美月が誘った。

「えっ!？」

その出来事に1番驚いたのが光だった。

「何でおまえが驚くんだよ？」
慶がツツコミを入れる。

光は一人焦っていた。

俺が好きなさおり、俺を好きな美月。

その2人が風呂に行くのだから心配でならない。

人の心配をよそに2人は風呂場に向かった。

「あゝなんかまだあつついなあ…」
風呂上がりの美樹は愚痴った。

「そーだ、里志。一緒に屋上行こうよ？星が綺麗だと思うよ…」

「え、いいのか？」

「はっ？いいに決まってるじゃん。行くよ」

2人は屋上に行った。

「あいつらも急接近だな…」
呑気な慶。

光はそれどころではなかった。

……心配だ…。

風呂場内

「ねえ…」

美月が言った。

「さおりは光が好きなんですよ？」

美月が知っていたことに驚いたが素直に答えた。

「………うん。」

美月が言う。

「そっか！

…私ね、光にキスしちゃった。」

「…え!？」

さおりは一瞬頭が真っ白になった。

キスした？

どーゆーこと?？

「まあしたっていつでも頼にだけど…」

「……。」

さおりは黙って聞く。

「私も光のことが好き。」

美月のその一言に言葉を失った。
しかし、次の一言で我にかえた。

「さおりには負けないよ。」

さおりも負けずに言った。

「私だって負けないから」

8..学校での最後の1日。

宿直室内。

「あゝ心配だ!!」

光が部屋をうろうろ動き回る。

「さっきから何してんだよ!？」

慶がうざったそうに聞く。

ガチャッ

さおりと美月が帰って来た。

光が一気に緊張する。

「お、おかえり…」

2人が揃って光を見る。

なぜか怒られると思った。

しかし予想とは違い、2人はニコツと笑い、仲良さそうに会話している。

その様子にホッとした光。

しかし、このあとから2人の猛アピールが始まるわけだが、それはもう少し後の話。れはもう少し先の話。

同時刻、屋上。

ガチャッ

「あ、少し寒いね…」

濡れた髪をタオルで拭きながら美樹が言った。

「ま、まあ冬だからな!!」

明らかにあがっている里志。

まだ風呂に入っていないのにのぼせているようだ…

「でも月は綺麗だよ!!」

美樹の方が綺麗だ…

本当にそう思ったが、絶対に口には出さなかった。

「冬の夜空はきれいだからな!!」

「……………」

美樹が黙って遠くを眺める。

その横顔があまりにも綺麗で、里志はしばらく眺めていた。

「…ねえ、里志。」

遠くを見たまま美樹が話す。

「ん！？な、なに？」

「里志って私のこと好きなの？」

「え、いやその…何て言うか…」
動揺する里志。

恋愛だけは奥手なのだ。

「はいかいいえで答えて？」

「……は、はい。」

里志は真っ赤だ。

「じゃあ約束して？」

絶対に私を守るって！！

そして…絶対死なないって。」

美樹が里志を見る。

「えっ、ああ…。」

曖昧な返事をしてしまう。

「もっとシャキツとしてよ。いつもみたいに…」

「ああ！！絶対に美樹を守る。約束する！！」

そう言って2人は静かな夜の屋上でキスをした。

そうして互いの気持ちを確かめ合ったのだった…

19時12分宿直室

ガチャッ

里志と美樹が戻る。

そして全員に自分達が付き合うことを話した。

4人は2人のことを祝福した。

「浮かれんのもいいけど、リーダーの仕事忘れんなよ！？」
慶がちゃかした。

「当然。今まで以上に頑張るつもりだ！！」

「その意気だぜ、リーダー！！」
光は笑って言った。

22時35分

全員で少し仮眠をとった。

「そろそろ気持ちを切り換えるぞ!？」

ここからが本当の戦いなんだ…」

里志が言った。

「わかってる。」

「ああそれから、セントリー銃なんだけど、動くものを撃つから人間も危ないんで、人が通れない場所に置いたから。」

光が話す。

セントリー銃は付属のパソコンによってコントロール出来る。

それぞれ光から銃の撃ち方を教わり、扱える銃を装備した。

「銃を持つと気分が変わる…」

今日も慶が似たようなことを言う。

「今回は、前のように簡単ではないはずだ…

そう考えていた方がいい」

光が慶にそう言った。

そうして静かに戦いのときを迎えた。

12月8日00時00分

いつもと同じ凄まじい地震の音がした。

「……………」

昨日のような銃撃の音はしない。

前と同じく何も起こらない時間が続いていた。
しかし、しばらくして変化が起こる。

5時20分

カランカランカランッ

空き缶が揺れたのだった。

「きた！！みんな静かにしろ…」

みんなで辺りを警戒する。

ドガガガガッ！！
セントリー銃の音がした。

「裏だ!!」

パソコンの銃の弾数を表す数字が勢いよく減っていく。

2000

1885

1678

かなりの数のようだ。

ガシャーン!!!

玄関の方から音がした。

「くそっ！侵入された。」

「里志、慶!!!行くぞ。」

光が銃を持ち立ち上がる。

「行くなって校内にか？」

慶が不安そうに聞いた。

「ここがばれたら逃げ道がない。

ガラスも一回しか割れてないから奴らも少数のはずだ。今のうちに数を減らす。」

「分かったよ。」

「行ってくる!!」

光がそう言うときおりと美月が反応した。

女子を部屋に残し、3人で固まって行動を始めた。

「隠れながら進もう」

だいぶ進んだところに奴らを見つけた。

化け物は3匹、廊下を3人に背を向け進んでいる。

直ぐさま銃を構える里志と慶。

「待て、まだだ!」

光が止める。

「どうして?」

「奴らに今撃っても教室に逃げられる。

それよりも少しいったら両サイド壁の場所があるだろう?

あそこにいった瞬間撃ちまくる。」

「了解…」

化け物に気付かれないように後ろから近づく。

「窓の外に化け物に見えるか？」

「いや、いない…」

「よし、じゃあ行くぞ！！カウント5で行く。
構えろ。」

「5」

「4」

「3」

「2」

「1」

「撃てー！！！！」

「うおおおお！！」

「ああああ！！！！」

ドガガガガ！！！！

ドガガガガ！！！！

一斉に撃ちまくる。

「ギィイヤアア!!」

狭いスペースで集中攻撃を受け、化け物は倒れた。

「:やったか?」

3人は銃をおろす。

化け物はぴくりとも動かない。

「へっ!! ちょろいな。」

慶は、化け物を倒したことで強気に言った。

里志が窓を見て驚いた。

「まずい!!」

その言葉に2人も窓を見た。

化け物がこっちに走ってくる。

銃の音か、化け物の泣き声のせいかわからないが奴らに気付かれたようだ。

「戻れ!! くるぞ!？」

ガシャーン!!

光達の後ろの窓から、化け物が一匹入って来た。

「挟まれた!!」

里志が叫んだ。

「くそっ!!」

光は窓を開け、持っていた銃を構えた。

「俺が外の奴らを片付ける!!」

そいつは任せたぞ!？」

光はそう言って外から向かってくる化け物を撃つ。

後ろの一匹はこっちに向かって走る。

「慶、撃て!!」

里志と慶が銃を撃つ。

しかし化け物は廊下から教室に隠れる。

「ちくしょう!!!!」

「行くぞ、教室でけりつけるしかねえ…」

里志が化け物の隠れた教室へ進む。

「接近戦だ、ライフルは不利になる。」
光が撃ちながら言った。

「ならこれしかないか…」

2人はナイフを持って中に入った。

ガラッ！！

化け物はいない。

隠れているのか？

里志が手で合図する。

（俺は左、慶は右から探せ？）

広い教室を慎重に進む。

ガタッ！！

奥の机が動いた。

里志が指を指す。

ゆっくりとその机に近づいたとき

「キシヤアアッ!!!」

机から化け物が里志に飛び掛かった。

「うあっ!!!?」

床に倒れる里志と化け物。

「里志!!!?」

慶が駆け付ける。

2人は暴れているが、化け物の舌が里志の首に巻き付いた。

「う…がはっ!!!?」

首を押さえる里志。

「はなせ、怪物が!?!」

慶が持っていたナイフを化け物の背中に刺す。

何度も刺す。

「キィアアア!!!」

慶のナイフが化け物の急所を捉え、化け物は倒れた。

「げほっ!ごほっ!!!」

里志は首に巻き付いた舌を取る。

「だいじょぶか？」

そう言っただけで倒れている里志の前に手を伸ばす慶。

「ああ：助かった。」

慶の手を借り、起き上がる。

ガラッ

「無事か!？」

光が教室に入ってきた。

「……なんとか。それより、外は？」

里志が聞いた。

「片付けた!!」

「おまえスゲーな？普通出来ねーだろ……」

慶は驚くというより呆れ気味だ。

「とにかく戻るぞ。いつまでも帰らないと心配するだろうし……」
光がそう言ったとき、外から化け物がまとまって向かって来た。

「また来たぞ!!」

「あゝしつこいつの!!」

慶はそう言いながら何かを投げた。

「お、お前…今何投げた？」

光が恐る恐る聞く。

「手榴弾。」

「伏せろー！ー！ー！！！」

ドーン！！！！

大きな音と共に近くのガラスが割れ、すごい衝撃を感じた。

パラパラパラ……

破片が落ちる。

化け物は間違いなく死んだ。

「てめー！あぶねーだろ？」

光が怒る。

「あれしかアイデアが浮かばなかった。」

慶がボソツと言う。

「ならしかたないだろう…」

里志が頷き言った。

2人は頷き合う。

化け物を倒したことで2人は一回り（心が）強くなったようだ。というより、命知らずになりつつあるわけです。

「おまえら頭打ったか？」

まとも？な光はそう言った。

「とにかく今度こそ戻るぞ…」

ゴゴゴゴゴ！！！！

ゴゴゴゴゴ！！

教室の時計を見る。

「8時……何とかなったな！！」

ガチャッ！！

宿直室に戻った3人。

「里志！！」

美樹は里志に抱き着く。

よほど心配だったようだ。

「心配かけた。」

里志が笑う。

「……ただいま!?!」
光はさおりに言う。

「ただいま……じゃないわよ!?!?!?!」

ボカッ

さおりは光を叩く。

マジで痛い…

しかしさおりの涙を見て痛みが吹っ飛んだ。

「ごめんな…」

「はあ…」

美月はため息を吐いた。

「どう見ても両思いだよね…。
私には勝てない……かな。」

「どうかしたか?」

慶が心配する。

「んーん、いいの!!
それより、あの爆発何?」

「俺の投げた手榴弾…」

「プッ!! 慶って馬鹿じゃないの?」

「よく言われる…」

「馬鹿もほどほどにね…?」

「美月といれば良くなるんだけど。」

「……バーカ!!」

12月8日9時00分

「今の現状からいって隠れ家を変えた方が良くないか?」

例の会議が始まった。

「何で?」

慶が聞く。

「おまえがここをめちゃくちゃにしたからだよ!!」
敵に居場所がバレてる上にこの被害はたしかにまずい。

「すみません。」

慶がへこむ。

里志が立ち上がる。

「じゃあ、新しい場所を探しに行くか？」

「賛成〜!!」

9時30分校庭。

「よっしゃみんな！」

お世話になった学校に感謝しよう。」

「今までありがとうございました。」

6人は手を合わせる。

「じゃ行こう！」

いつの間にか、3組のペアが出来上がっていた。

様々な経験を得て、

6人は別の場所を探しに学校を後にした。

9..新しい戦場と敵。

6人は別の隠れ家を探して町を歩いていた。

「……で、どっかあった？」

「……………ない。」

なかなか良い物件が見つからない。

「商店街でも行ってみようよ!!」
さおりが言い出した。

12月8日10時30分商店街。

「誰もいないね……?」

人の気配を感じない…

みんな奴らにやられてしまったんだろうか?

そんな嫌な考えを振り払う光。

『ジジ…………ジ…』

電気屋の前にならぶケーブルテレビだ。

一つだけニュースをやっていた。

『今現在このニュースを見ている人が何人いるかわかりません。事態は大変深刻になっています。』

謎の生物は世界各地で目撃されており、もはや戦争と呼べるほどになっています。

アメリカ政府はこの生き物をHIVE^{ハイフ}と名付けました。

HIVEの正体は全くわかっておらず、死者の数は増える一方です。東京では人口が20分の1にまで減少しています。』

「HIVE？」

それがあいつらの名前か…」

テレビを眺めながら光は言った。

「人口が20分の1って、ここも私たちだけかもね…」
美樹は呟いた。

「とりあえず今は探そう。」

奴らの名前と、現状を確認し商店街を後にした。

「ん！？何だあれ？」

里志が遠くを指差した。

目を細めて見ると、何か大きな黒いものが道路の上に倒れている。

近くまで行き、その正体を見て6人は驚いた。

「な…なにこれ!?!」

その黒い物体はHIVEだった。

しかしその姿は今まで見たHIVEとは違った。

通常の2倍の大きさ、8本の手足、そして、真ん中に大きな口があった。

「こいつらって何なんだよ!!
いろんなタイプがいるのか…?」

新型HIVEを見た6人は、新しい恐怖を感じていた。

「こいつきつと俺らを喰うぞ!!」
慶も恐れている。

「なににせよ、一筋縄ではいかないな…
早いところ場所を確保しないと!!」

もうすぐ夕方になる。

光は焦っていた。

少し進むと工場があった。

目の前に大きなシャッターが見える。
おそらく車の整備工場だろう。

「調べてみよう。隠れ家にいいかもしれない。」
焦る光は一人先に進んだ。

「おい、光!!」

あいつ何焦ってんだ？」

里志たちが後から追い掛ける。

ガラガラガラ

シャッターを開ける。

中はいかにも整備工場らしく、いろんな道具が置いてあった。
中でも積み上げられた廃車が目につく。

階段をあがったところに事務所が見える。

「ここならいけるだろ？」

光は嬉しそうに5人の方を見た。

「!!」

光は突然表情を変えて叫ぶ

「後ろだ!!」

里志が後ろを見た瞬間、若い男が里志の腹を殴った。

「ぐはっ!!!」

倒れ込む里志。

その横から別の男が慶を殴る。
慶も倒れた。

2人とも気絶したようだ。

「里志！！慶！！」

光が叫ぶと上から男が飛び降りてきた。

ゴツッ

バットで殴られ倒れる光。

「光ー！！！！」

さおりの叫ぶ声が聞こえるが、次第に意識が遠退く。

「さ……おり……。 」

22時15分整備工場事務所

「………。」 光は目を覚めました。

グッ！！

手が動かない……

どうやらロープで手を縛られたようだ。

ズキッ！！

くっ！！

頭が痛む…

ここは………

そうだ！！

工場に入って誰かに頭を殴られたんだ！！

「くそっ！？」

ロープは解けない。

しばらくじたばたしていると何かが足に当たった。

「ん？」

光はその方向を見る。

「里志！！慶！！」

2人もロープで縛られ、まだ気絶しているようだ。

「おっ！？1人起きたぜ。」

20歳くらいの坊主頭の奴がやってきた。

そのあとからもう2人、柄の悪い連中がきた。

「おはよう…かな？」

リーダー風の男が話す。

「おい！！何の真似だ？」

光が冷静に聞く。

「うん…それを話すのもいいがお連れのお嬢さん方は心配じゃないのかな？」

リーダー風の男が言った。

「てめっ！！あいつらになんかしたのか！！？」

「んゝ。実にいい叫び声だ。楽しめそうだな…」
男ら3人が笑っている。

「ふざけんじゃねえ！？

俺の質問に答えろ！！」

「大丈夫…丁重に扱ってるよ。……今は……ね。」
男は不気味に笑った。

その様子にぞっとする光。

「自己紹介がまだだったな…。

俺は…シュウと呼ばれている。坊主頭がキュウ、もう1人がザイだ。」
シュウが話を続ける。

「おまえが光だな。

…お友達に聞いたんだ。

はつきりいつておく!!

俺はこれからおまえらを殺す。

ただ、普通にやっても面白くねえ…

だから俺は考えた。

化け物に殺させようとな。まあ、いずれ話す…

おい…連れてけ!!」

光らは無理矢理別室に連れていかれた。

そこには女子3人がいた。

里志と慶も目を覚ました。

「な、何だここ？」

慶がキョロキョロする。

「全員起きたか…

よく聞け。

俺らは1日からずつここに隠れてたんだ。だが、3日に化け物に見つかった。

俺はとっさに下っ端の奴を、下の化け物のいるところに落とした。するとどうだ？

奴ら俺らには目も向けず、全員で下っ端のところに行ったんだ。

奴らはまるで蟻だ：

目の前にエサがあるならそれを取って帰るんだよ。下っ端のおかげで俺らは助かった。

その時ふと気付いたのさ！！

俺らがエサをやれば奴らはおとなしくエサを拾って帰るんだと。そういつてシュウは笑った。

「つまり……どーゆーことだ？」

慶が本気で質問する。

「つまり俺らが蟻のエサ、化け物のエサってわけだよ……」
光が話す。

「そーゆうこと。賢い奴って嫌いじゃないぜ！？」

「だからおまえらのエサの順番を今から決めておかないといけないなあ！！」

シュウが笑う。

ちらっ

シュウが時計を見る。

「11時半か：おまえ？」

美月を指差す。

「おまえが1番だ。」

「い、いや…」

美月が泣き出す。

「嫌じゃねえんだよ!？」

」

シュウが美月の髪を引っ張る。

「やめろ!!!」

光が叫んだ。

「あ!？」

「俺が1番に行く。」

その言葉に全員が反応する。

「だ、駄目だよ光…」

今度はさおりが泣き出す。

「もともと、俺が焦ったのが原因だ。俺が1番に行く。」

「光!？止めてよ。絶対死んじゃう…」

さおりは涙が止まらない。

「あっはっはっは!!」

女の前だからってカッコつけやがって!!

やっばてめえは嫌いだ！

そーゆう奴が早く死ぬってことを教えてやるよ！！」

シュウが光を掴み引っ張る。

そして、階段から、縛られたままの光を蹴り落とした。

「てめえらはそこで黙ってこいつの死に様を見てろや」

ガチャッ

シュウは別室の鍵を閉めた。

窓が大きいので、5人は光の姿がはっきり見えた。

「光！！！」

「光！！！」

5人は光の名を叫ぶ。

下で光はもがいていた。

「くそっ！！」

手のロープさえ解ければ…」

ウイイーン！！

階段が上に上がっていく。

「この階段は自動式でね。動かせるんだよ…」
シュウが上から見下す。

「さあショーの始まりだ!!」

0時00分

ゴゴゴゴゴ!!

ゴゴゴゴゴ!!

地震が光の恐怖を倍増させた。

くそっ!!

どうすりゃいいんだ!?

どうすれば……

「キシヤアアア!!」

エサのにおいを嗅ぎ付けたか、HIVEがやってきた。

全部で5匹。

ゆっくり光の元に向かってくる。

「くっ!?!」

何とか起き上がった光は、周りを見て何かないか探す。

ちくしょう!!

どうする…

「キシヤアア!!」

「ガアアア!!」

一歩一歩近づく5匹のHIVE。

!!!!

光が何かを閃いた。

「一か八かだ!!!!」

クルッと後ろを向き、光は走り出した。

「ガアアア!!」

その様子を見た1匹HIVEが後を追いつけ走る。

「うおおおお!!!!!!」

ドーン!!

光は勢いよく、積み上げられた廃車にタツクルした。

グラッ

廃車が揺れた。

ドドドドド！！！！

ガラガラガッシャーん！！！！

廃車の山は一行に倒れ追いかけて来たHIVEを巻き込み崩れた。

「はぁはぁ…やったぜ。」

壊れた廃車のガラスで手首のロープを切る。

「残りはあと4匹…」

光は近くにあった1、5メートルほどの細い鉄パイプを持った。

「こいつら倒したら次はてめえらの番だ！！！」
そう言ってシュウラの方を指差す。

「へえ…そいつは楽しみだ！！！」
シュウが笑う。

「ガァァァ!!!」
HIVEが光を囲む。

「さあ、かかってこいや!!!!!!」

10：孤独

0時を過ぎてからどれだけの時間がたったのだろうか…
俺は今何をしているのだろうか。

俺は何を…

何をしたいんだろう…

「キシャアアア!!」

「!?!」

回りに醜い化け物。

俺は…

俺は大切なものを守るために戦っているんだ!!!!

「はっ!!」

一瞬意識が遠くにいったようだ…
死ぬかも知れないってときに。

「ガアアアア!!」

HIVEが4匹周りを囲む。
手には鉄パイプ。

「さあ、かかってこいや!!!」

光は叫んだ。

正面の1匹が光に向かって走る。

「ガアアア!!!」

舌を伸ばす。

「うおおおお!!!」

光は鉄パイプを横から振り上げた。

ゴキッ!!!

鈍い音がる。

どすっ!!

化け物が数メートル飛んで倒れた。

「おまえらなんて怖くねえ…どこからでも来い。」

鉄パイプを軽々しく扱い、構える光。

何だろう…

いつもより体が軽く感じた。

HIVEは素早く動き、光に襲い掛かろうとする。

シュッ!!

「ガアアアア!!!!」

ゴキンッ!!!!

鉄パイプがHIVEを捉える。

「うらああ!!」

ガツッ!!!!

次々とHIVEを倒していった。

「はぁ…はぁ…」

素早い動きにも体がついていく。何でだ…?
この感覚、どこかで…

ふと光はバスケのことを思い出した。

そーか!!

バスケ部で反射神経とか多く使ってたから、奴らの動きも見切れるんだ!!!!

「ふっ!!

バスケやっててよかった。」 光は笑った。

パチパチパチパチ!!
シュウが拍手している。

「実にすばらしい格闘センスを持ってるな…
俺らのガードマンにでもなる気はないか？」

「人を平気で殺すことが出来るような奴のために、戦う気はない!!
俺は…守るべきもののために戦う。
その邪魔をするなら、容赦しないぞ!？」
光は凄んだ!!

「守るべきものか…
そんなものとづくに失ったさ!!
俺は…生きるために……」
シュウがそう言ったときだった。

ガシャーン!!!
2階の窓からHIVEが侵入した。

「あいつは!!」
そのHIVEは手足が4本ずつある、道路で見た奴と同じタイプのHIVEだった。

「うひゃあああ!!!」
シュウの仲間のザクが逃げる。

「アッアアアア!!」

悍ましい叫びを出す新型HIVE。

ブサッ!!!

「がはっ!!!」

化け物の長いニョロッとした手が、まっすぐザクの腹に突き刺さった。

「ザクー!!!」

キュウが叫ぶ。

「ゲホッ!! た、助けて…」

血を吐きながらザクが助けを求める。

ニユルッ!!

別の手がキュウの首に巻き付く。

「がああああ!!!」

HIVEは次にシュウを見る。

「や、やめろ!!」

屍餅をつきながら後ろに下がるシュウ。

「くるんじゃねえええ!!!!」

「階段を降ろせ、シュウ!俺が助けてやる!!!!」

光の声を聞いたシュウが何度も階段のスイッチを押す。

ウイイーン。

ゆっくりと階段が降りてくる。

「早く助けに来いよー!!!!」

シュウが泣き叫んだ。

ウイイーン……カチッ。

階段が止まった。

急いで階段をあがる光。

「うわ、うわ、うああああ!!!!」

シュウの叫びが聞こえた。

あがり切った光がその方向をみる。

「なっ……」

シュウは化け物の大きな口に喰いちぎられていた。

「遅かった…」

H I V Eは光を見る。

「！！！」

来るなら来い：

さおり達には触らせねえ！！！」

光が鉄パイプを構える。

「ああ、ああ！！！」

H I V Eが叫ぶ。

来る！！

そう思った。

しかし化け物はクルツと後ろを向き、窓から出て行った。

「……行った…のか。」

光が肩の力を抜く。

「光！！」

里志が呼ぶ。

「待ってろ、今開けてやる。」

ガチャッ！！

鍵を開けた瞬間、さおりが光に抱き着いた。

「ばかつ！！どれだけ人を泣かせるのよ。」

さおりは大粒の涙を流す。

「わるい…」

「もう…知らないんだから！！」

さおりが笑顔で笑いかける。

「さおり…」

光はぎゅっと強く抱きしめる。

4時05分

「あいつ、俺を襲えたのに襲わなかった…」

光が里志に話す。

「…必要な分をとったら後は帰る。…本当なのかな。」

「だとしても化け物はいっただけじゃねえだろ？」

慶が言った。

「場所を変えるのか？」

「もうしばらく様子を見よう。」
光が言った。

「あのさ…光。」
美月が光に近づく。

「ん？どうした？」

「ありがとね…私をかばってくれて。」

「ああ、どういたしまして…」
光はニコツと笑った。

「光…私やっぱりあなたが…」

サツと美月の口を塞ぐ光

「俺らは友達だ。美月が辛いときは助けてやる。それだけじゃダメか？」

「光…うん、わかった。」 美月は考え込む。

ああいったけど、私はやっぱり光が好きなんだよ。

たとえば今は友達でも、私はあきらめないから。

そのうち辺りは明るくなっていった。

「朝か……」

「油断するな…まだ9時じゃない。」

「でも、今日はひどく長く感じるな…」

「あんなことがあればしかたないさ。」

「ただ、敵は化け物だけじゃない。

時として人間の方が恐ろしいこともあるんだ。」
里志が言った。

「でも、俺は人間を信じる。

みんなただ怯えてるだけなんだ。

シュウも、最後のあの時は敵じゃなかった…

人間は分かり合える…そう信じたいな」

光はどこか悲しげにそういった。

結局その後は何もないうまま、9時を迎えた。

ゴゴゴゴゴ！！！！

ゴゴゴゴゴ！！

6人は終わりを告げる地震と、静か過ぎる町を眺めていた。

一体今人類はどのくらいいるんだろう。

この町に人はいるのだろうか…

そんな普段ならおかしい疑問ばかりが頭を過ぎっていた。

そして6人は思った。

このまま生き残ったら何になるんだろう。

静か過ぎる町を目の前に、大きな孤独を感じてしまう。

そんな思いも虚しく、今日も生きるために戦うのだった。

11..鐘の音

12月9日9時30分事務所内

9時を迎え、今日の恐怖は終わった。

しかし、目の前で人が殺されるのを見て、そして9時を迎えても静かな町を見て、6人は孤独を感じていた。

「なあ光…」

慶が話しかける。

「俺達さ、このまま必死に生き延びて、結局どうなるんだろう？」

「……。」

光は慶の質問に答えられなかった。

町の様子を見る限り、もう人はほとんど残っていない。賑やかだった町がもう元に戻ることはない。

そう考えると、生き延びて何になるんだろうと思ってしまふのだ。

「そんなこと考えても仕方ないだろ？」

俺達は今を生きるしか出来ないんだ。」

里志が慶に言った。

「でも、地球はもう元には戻らないよ。

大勢の人が…いないんだもん。」

美月が切なく言った。

「…………。」

みんな黙っている。

黙っているというより、自分の生きるための理由を探している。
といった感じだ。

光も黙ったままだった。

俺の生きる希望ってなんだろう…
勉強する学校もない。
それ以前に勉強する必要すらない。
何のために生きるんだ!?

その時だった。

ゴーン!!

ゴーン!!

ゴーン!!

光の耳に鐘の音が響いた。

この音…前に聞いたことがある。
どこから聞こえてくるんだ?

光は窓から外を眺める。

「どうした？何探してる？」

里志が尋ねた。

「この鐘の音、どこから聞こえてるのかと思って…」
光がそういうと、里志は不思議そうな顔をした。

「はっ？鐘の音ってなんだよ？」

「え？聞こえてないのか？今鳴ってるだろ、ゴーンゴーンって…。」

「何も聞こえないよね？」

美樹も聞こえないようだ。

「何で聞こえないんだ？」

鳴ってるじゃん…ほら。」

慶と美月も聞こえないと言っている…

「さおりは聞こえてないか？」

「えっ！？き、聞こえないよ…鐘の音なんて。」

さおりは慌てた感じに答えた。

「何で俺だけなんだよ…」

光はつぶやいた。

「……。」

ガッ！

しばらく沈黙していた光は突然立ち上がった。

「おい、どうした？」

里志が聞く。

「突き止める！！」

「は！？」

「だから鐘の音が聞こえる場所を突き止めんだよ。そうすりゃなんかわかんדר？」

光は窓を開け、鐘の音を黙って聞いていた。

「…あつちから聞こえる！！」

「はあ…仕方ねえ。確かめに行くか！！」
里志が言った。

みんなが腰をあげる。

「だ、だめだよ…！！」
さおりが叫んだ。

「い、いきなりなんだよ？」

「行っちゃだめ…」

なんか、嫌な予感がする…」
さおりは真剣だった。

「…でも、俺は確かめたいんだ!!」

「鐘の音なんてないのよ!!」
さおりは強く否定した。

鐘の音はまだ鳴っている。

「ならさおりはここで待っていてくれ。

この鐘は、何か俺に伝えようと思ってると思うんだ。
それがなんにしても、俺は知りたい。」

光は素直に話した。

「わかった…」

光の思いに負け、さおりが頷いた。

「でも、私も行く!!」

「あんなに嫌がってたのに？」

「うん。実は…私にも聞こえるの。」

さおりの発言に5人も驚く。

「聞こえるのか？」

「ゴーンって音が。」

光が聞く。

「それだけじゃない、何言ってるのかわからないけど男の声がする。
だから怖かったの…」

「マジかよ!!」

「2人だけに聞こえる鐘の音と男の声……
HIVEと関係あんのか？」

「なににせよ、確かめに行くしかねえ!!
覚悟はいいか、さおり。」

「うん。」

こうして6人は鐘の音の方角へ歩き始めた。

12月10日11時05分

「こっちだ!!」

光が先導して進む。

だんだん音が近づくのがわかる。

「まだ男の声するか？」

光がさおりを心配する。

「うん。よく聞こえないけど、私を呼んでる気がする。」

町外れの場所まで歩いて、人気のないところに着いた。

「ここだ!!」

この中から聞こえてくる。」

そこにあったのは大きな教会だった…

「こんな場所に教会があったなんて知らなかった。」
教会を見上げながら美樹が言った。

「でけえな…

でも教会の鐘、動いてねえぞ!？」

慶が光に言った。

「間違いなくここだ!!」

感じるんだ!! 誰かが呼んでるのを…。」

光はさおりも何か感じてるのかと思って、さおりを見る。
しかし、さおりは頭を抑えうずくまっていた。

「さおり?

どうしたさおり!!!」

「あ…頭が…痛い。」

誰かが私を呼んでるの…何度も…何度も…。」

さおりは地面に膝をついた。

「おい!?! しっかりしろ!! さおり!?!」

光がさおりの肩を掴んで話しかける。

4人も心配そうに見つめる。

ガチャッ！！

教会の扉が開いた。

中から神父らしい服を着た男が現れる。

「おや？どうされました、このようなところで…」

「神父さん：助けてくれ！！さおりが苦しそうなんだ。」

「わ、わかりました。」

とりあえず中へ…」

神父に連れられ、大聖堂でさおりを休ませる。

「ところで貴方がたは？」

神父が尋ねる。

「俺は矢吹光です。後は里志、慶、美樹、美月、そして横になってるのがさおりです。」

光が説明する。

「ふむ。それでこんな町外れの教会に何の御用ですか？」

「実は……………」

光は今までのことを話し始める。

「なるほど…」

光さんとさおりさんにだけ聞こえた鐘の音を辿ってここまで来たと言っわけですか……………」

すいません、少し電話をしてきてもよろしいですか？」

神父は急に態度が変わり、いそいそと奥に行ってしまった。

それを見た慶が光の元に近づき言った。

「なあ…この教会おかしくね？」

「おかしいって何が？」

美月が慶に聞き返す。

「だって、こんな広い教会で、いるのはあの神父だけだろ？それに、こんな時に誰に電話するんだ？」

言われてみれば変だ。

5人は神父の電話が気になった。

「俺ちょっと盗み聞きしてみる。」

慶はドアの近くに行き、聞き耳をたてる。

微かに神父の声が聞こえてきた。

「……い、そうです、見つけました。

まちが……く……です。時間を稼ぐので、お早く…」

「見つけた？

……時間を稼ぐ!？」

慶は急いで光達の元に戻る。

「どうだった？」

「まずいかもしんね…

見つけたとか、時間稼ぐとか言ってやがったぜ!」

「どうするよ？」

里志が光に聞いた。

「……少し、様子を見てみよう。」

ガチャッ!!

神父が戻ってきた。

「いやー、すいません。

シスター達の帰りが遅いので心配になりました…。」

シスターに電話？

とてもそんなふうには見えないが…

やはり何か隠している？

「ところで、君達は奴らから隠れる場所があるのかね？」

「いえ、とくに…」

「ならここに泊まりなさい。」

「……いえ、遠慮させていただきます。さおりを連れて出ていきます。」

そういつて光は立ち上がりさおりの近くに歩く。

「そういうことなんで、失礼します。」

里志が神父に一礼する。

後に続いて慶達も立ち上がる。

「クッククッ!!」

突然、神父が笑い出した。

「残念だが……そうはいかないんだよ!!」

神父は先程と態度が変わり、すごい形相でこちらを見る。

「あんた誰だよ？」

光が聞いた。

「それを知る必要は………ない!!」

バーン!!!!

その瞬間武装した軍隊が扉から現れ、光達を囲む。

「何だこいつら！！！！」

慶が一步前に出る。

「動くな！？」

軍隊が銃を構える。

「くっ！！！」

後ろに下がる慶。

コツ…コツ…

神父がゆっくり向かってきた。

「やれ。」

ガツッ！！！！

軍隊は銃で5人の首を殴る。

「がはっ！！！」

5人は倒れ込み、気絶した。

「例の場所に運んどけ…

ボスに伝えろ、“神の予言を実行する 때가きた” とな！！！」

12..神話

12月9日19時29分??:?

「ん……」

ガバッ!!

光は飛び上がるように起きた。

ここはどこだ？

周りは白い壁、あるのは窓ガラスだけ。
後ろに里志達が寝ていた。

「おい里志…起きろ。」

光は里志の肩を揺らす。

「ん……、ここは？」

美樹が先に起きた。

「美樹!!大丈夫か？」

「うん、平気。」

続いて里志、慶、美月と起き始める。

「さおりがいない!!」
光が叫んだ。

「さおりはどこいった？」

誰かあいつをみてねえか！！？」

光は慌てる。

「落ち着け！！」

きつとあいつが話すさ…」

里志の目線の先にはあの神父がいた。

「お目覚めかな…」

「てめえ！！ さおりはどこだ！？」

光が神父に近づく。

「おっと、ストップだ。」

神父は銃を構える。

「くっ…！！」

立ち止まる光。

「そんなに彼女が心配か？ しかし、彼女は最重要人物だ！ そう簡単には教えられんのだよ…」

そう言うのと楽しそうに笑い始めた。

「悪魔め！！」

「いや…、神だよ。」

ガチャッ!!

ドアから誰が入ってきた。

「……ここで何している？」

50くらいだろうか：

キリッとした顔の男が部下を何人か連れて入ってきた。

「ボ、ボス：！！」

神父は慌てて姿勢を正す。

「何してると聞いたんだ。」

「は、はいすいませんボス。捕まえたこいつらが大人しくしているか気になりますて：」

神父がそういうと、ボスらしき男は部下に何か命令し、神父が連れていかれた。

「すまなかったね：

出来の悪い部下はこれだから困る：」
ボスが話した。

「それより、さおりをどこにやった？」
光がそいつに聞いた。

「さおり……、ああ例の彼女か。
大丈夫、別室で寝ている。」

「なら、さおりに会わせろ！！」

「それはできない。」

「なぜだ？」

「……。」

少し考えた後ボスが話し出した。

「君達は知っておくべきかも知れないな。

今回の事件の真相を……」

「事件の真相？」

慶が聞いた。

「そう、あの化け物の正体だ。

神話にあるアダムとイヴの話は知っているか？」

「だいたい……。」

「神が2人の男女の人間を造り、子供を産み、今の我々がいる。みんなが知ってるお話だ。しかし、その話は事実なんだ。

そして、それ以上に残酷だ。」

ボスが話を続けた。

「真実はこうだ……

神は3人の人間を造った。アダムとイヴ、そしてHIVEを。」

「HIVEだと!？」

5人は聞き返した。

「そうだ。

そして3人は協力して、過ごしていた。

しかし神はHIVEの醜い姿に怒りを感じた。

そしてアダムとイヴを残し、HIVEに呪いをかけた。

1時間ずつ動けなくなる呪いを……。

1日が過ぎるごとにHIVEはどんどん動けなくなっていくた。

そして、父親である神、アダムとイヴを恨みながら12月24日、HIVEは完全に石となった。

神はHIVEを海に沈め、アダムとイヴに言った。

“産めよ。増やせよ。”

そして、今の我々がいるというわけだ。」

「それと今回の事件とどう繋がる？」

「HIVEはその後何千年も呪われ続けた。しかし、イエス・キリスト、彼が死んだ時神の力が弱まった。

そして奴は今年の12月から自由へのカウントダウンを始めた。

2010年12月24日、やつの呪いは完全に解ける。

そして、それまでに我々人類に恨みをほらし、神をも殺そうとしている。

それが今回の事件の真相だ…。」

「つまり、HIVEは過去の恨みをほらして、新たにHIVEの世界を作ろうとしている。

それらは全て神がHIVEを嫌ったことから始まる、そういうことか？」

慶が言った。

「簡単に言えばそうなる。」

「なぜ地震が起こる？」光が聞く。

「HIVEは海の底に沈められた。やつは今地底に潜んでいるんだ。だから地上に上がる時地震が起きるんだ。

活動できる時間と共に…」

「何でおまえらはそんなことを知ってるんだ？」
里志が聞く。

「我々の組織名は“D G” ディスティニーゴッド、神の決めた運命という意味だ。」

我々は神の忠実な部下、この話も神から聞いたのだ。私の名はペガサス：

神の家来だ。」

「神がそう話したのか？」

H I V Eが恨んでいると：」

里志がさらに聞く。

「だからそういつている。」

「信じられねえな：

うさん臭いね！！」

光は信じなかった。

「ならさおりさんに聞こえた男の声は何だと思うのかな？」
ペガサスは聞いた。

「それは：わかんねーけど。」

「神の声だよ！！」

「鐘の音も声も、神からの警告だ。」

現におまえらもその音を頼ってここまで来たんだ。
偶然だと思うのか？」

「なぜさおりに聞こえるんだ？」

光の質問にペガサスはピクツと動いた。

「わかりませんか？」

彼女がイヴの生まれ変わりだからだよ…」

「なっ…!!」

5人は驚く。

「さおりが…イヴ!？」

「そう。」

神は3人にそれぞれ力を与えたのを知っているか？

アダムには愛を無限の命に、H I V Eには憎しみを無限の力に、そしてイヴには優しさを無限の守護に。」

「イヴには、人間を守り癒す力がある。」

だからイヴをH I V Eの手に渡すわけにはいかない。イヴは我々の希望だ。我々は彼女を守らなくてはいけないのです。」

「さおりは俺が守る!!」

あいつに約束したんだ!!」

光は言った。

「我々が責任を持って守ります。

どうかわかっていただきたい。」

ペガサスは光に頭を下げる。

「……。」

光は沈黙する。

「光：さおりの安全を考えたらそのほうがいいよ。」
美樹が説得に入る。

「……わかった。
さおりを頼む。」

「はい。
あなた方はどうされます？ここに残りますか？」

「俺は残らない……
ここにいとさおりを連れ去ってしまいそうになる。」
光は下を向きながら話す。

「おまえがそういうなら俺も残らないよ！！」
里志が言った。

「里志……」
「今のおまえ一人だと心配だからな……！！」

結局5人とも残らないことになった。

「上まで送ります！」
ペガサスの案内で上まで上がった。

結局さおりには会えなかった。

エレベーターで上の教会まで上がる。

ガチャッ！

教会に着いた。

光はずっと寂しそうな顔をしている。

「元氣出しなよ。一生会えないわけじゃないんだし…」 美月が慰める。

「わかってるんだ…

でも……、これでよかったんだろうか？

さおりはそれを望んでいたんだろうか？」

光は大聖堂の椅子に座る。

慶が肩を叩いた。

「HIVEに殺されるよりマシだろう？
なっ里志？」

「……………」

「里志？」

「ん…どうした？」

「ぼーっとしてたぞ、大丈夫か？」

「大丈夫だ。」

「まっとにかく光はよくやったよ。
あとはあの人達に任せましょ。」

これでよかったのか？
話が出来すぎてないか？
どうしても納得できない。

ガタッ！

奥のテーブルが動いた。

「誰だ！？」

5人はテーブルに近づく。
そこにいたのはボロボロで、傷だらけの神父だった。

「おい、大丈夫かよ…ひどいな。」
里志と光が神父を起こす。

すると虫の息で神父が口を開いた。

「あ…ああ…おまえらどうしてここにいる？」

「えっ…！？」

さおりをペガサスに預けて俺らは他に移動しようとしてるんだ。」

「イヴをペガサスに…？
おまえらなぜ簡単に渡した？」
神父が尋ねる。

「人間の希望“イヴ”を守るのが奴らのつとめだろ？」

「イヴを守る…？」

ふっ……ふぁっははは!!」

「何がおかしい!!」

「おまえらはペガサスにまんまと騙されたな……
やつの話すことは嘘ばかりだ。」

「……どうゆうことだ!？」

「D Gはイヴを守る組織じゃない。
イヴの守護の力を利用し、自分達の身を守りたいだけだ!!
イヴの能力を使えば、H I V Eに気付かれることはない。
そのためにイヴが必要だったんだ。」

「何だと!!」

「そのための機械を今奴らは作っている。
完成まであと5日ってところだろう。
完成したら、イヴの能力を吸い取り、守護エネルギーを放出させ、
存在を消す。
しかし、その代償にイヴは死ぬ。」

「さおりが死ぬだと?
奴らは人類を守る組織だろ。そんなことするわけない!!」

「仲間だった俺をここまで痛め付ける奴らだ。
殺すことなど訳無い……
そうやって奴らは神のためにといろいろやって来た。」

「そんな……」

光は膝をついた。

さおりが殺される。

さおりが…

「おい、しっかりしろ！！俺らで取り戻せばいいんだ！！」
里志が叫ぶ。

「無駄だ！」

神父が言った。

「そのエレベーターを見ろ。
上に上がってきただろ。

武装集団がおまえらを殺しにくる。
秘密を知ったおまえらを。」

「なんて奴らだ！！」

「早く逃げるといい。

死ぬのは私一人で十分だ…」

「逃げろだと…！！」

さおりが殺されるってのに逃げるわけにはいかねえんだよ！！！！」
光がゆらりと立ち上がる。

異変に気付いた里志が言う。

「やばい！！慶、光を捕まえろ。」

あいつ周りが見えてねえ…」

ガシッ

慶が光を抑える。

「何しやがる慶、放せよ」

「すまない光！！」

ドスッ！！

里志が光を殴り気絶させる。

「来るぞ。早く行け！！」

「ここは私が食い止めてやる。」

神父がふらふらと立ち上がる。

「感謝します。神父…」

里志は光を担いで走る。

あとに続いて3人も走り外に出る。

「感謝します……か。」

何年ぶりに言われたことか。

そんな小さな幸せを忘れていたようだ。」

神父はそういつて、ポケットから手榴弾を出す。

エレベーターが開き、軍隊が出て来る。

「最後くらい正義のために使わせてくれ。
：強く生きろ、少年達よ。」

カチッ！！！！

手榴弾をにぎりしめ、軍隊に向かっていく。

「未来を託すぞ、矢吹光！！」

ドーーーーン！！！！

教会から爆発が起きる。

遠くから教会を見つめる里志達。

「神父：ありがとう。」

そのあと里志達は近くのビルに隠れることにした。

「ん……んん。」

光が目を覚ます。

「大丈夫か？」

「ここは？」

「近くのビルの5階だ。」

「そうか…」

むくつと起き上がりドアに向かう光。

「どこに行くつもりだ？」

里志が聞く。

「決まってるんだろ！！」

あのやろうどもからさおりを救い出しに行くんだよ。」

「今日はもう暗くなる。」

明日まで待とう。」

「ふざけんな！！」

んなの待ってられっかよ。」

光は再びドアに向かう。

がしかし、美月が光の前に立ち止まる。

「どけ美月！！！！」

「嫌だ。1人じゃ無理だよ」

「邪魔すんじゃない。」

俺だけでも助けに行く。

おまえには関係ねえだろ!？」

バシッ!!!

美月が光の頬を叩いた。

「……………」

無言の光。

「関係ないって何よ!!」

あんただけがさおりを心配してると思ってんの？

みんな心配してるよ。

だからこそ落ち着いて助け出す計画作ってんじゃない!!

あと5日あるのよ。

光が無茶して死んだらさおりを助け出せないんだよ。しっかりしてよ!!!

今の光、私の好きな光じゃない…」

美月はドアから屋上の方に走っていった。

「……………」

「落ち着いたか？」

里志が尋ねる。

「里志…俺…ごめん。
さおりが死ぬって思ったら何も考えなくて…
慶と美樹もごめん。」

「俺らはいから美月連れ戻してこいよ。」

「わかった。」

光は屋上に走る。

ガチャッ！！

屋上のドアを開ける。

辺りはすっかり暗くなっていた。

「美月…」

美月は手摺りに寄り掛かっていた。

「その、ごめん美月。俺がカッとなってひどいこと言っちゃって。」

「……………」

美月は黙っている。

「それで…その…」

「もういいよ、怒ってない。」

美月はくるっと振り向く。

「こんな言い方ひどいかもしんないけど、さおりちゃんが羨ましい。」

「だってこんなに光に想ってもらってるんだもん。」

「美月…」

「私、さおりちゃんに光を譲る。」

お互いこんなに想ってるのに邪魔しちゃう悪いもん。」

「だからこそ、絶対さおりちゃんを助けようね!」

「美月……サンキュー!!」

光は優しく笑う。

「もうっそんな顔見せないで!!」

ドキッとすんのよ!!」

「わりー!!」

さっ戻るぞ!」

「うん。」

ガチャッ!!

「帰って来たか。」

「わりー!!」

「光…」

里志が話し掛ける。

「さおりを救えんのはおまえだけだ。
無茶すんなよ？」

「ああ!!」

5人は手を合わせる。

「いーかみな!？」

絶対にさおりを救い出すんだ!!
力を合わせていこうぜ!!」

「おお!!!!」

この時からすでに、俺達は神の怒りに触れていた。
そうとも知らず俺は、俺の希望を取り返すことに必死だった。

13：敵陣へ

12月9日21時36分ビル5階

さおりを救うべく5人は作戦を考える。

しかし、相手は武装した組織とあって作戦は決まらなく、いつしか辺りは暗くなっていた。

「もう9時過ぎてるぞ。」

「じゃあ今日はあとやめよう。」

作戦会議をやめにして、夕食にする。

食べ終わった後、美樹が目を擦りながら言う。

「なんかすっごい眠いかも…」

当然だろう。

ここ最近まともに寝てないのだから。

「俺も疲れた…」

慶もソファーに倒れ込む。

「みんな寝ていいよ。」

今日は俺が見張りやるから…」

光が言った。

「どうした、眠くないのか？」
里志が心配する。

「さおりのこと考えると心配で寝れないんだ…
起きてるほうがまだ楽なんだ。」

「まあ任せるけど、無理だけはすんなよ？」

23時00分

光以外の4人は寝静まった。

光は一人、窓から教会を眺めていた。

「…さおりがイヴ。人類の希望……

そんなんでさおりは死なせない。

さおりはさおりだ！

人類じゃない、俺の希望なんだ……」

光はつぶやきながら涙を流している。

「……早く会いたい……！」

12月10日10時15分

ガバッ!!

里志が起きる。

「10時：終わったか。」

安心した里志は窓を見る。

窓の横で光が椅子に座りながら寝ていた。

「ったく!!

おまえが1番疲れてんじゃねえか…」
そういつて毛布を光にかける。

「見張りが聞いて呆れるぜ…」

11時00分

「んあ!!

寝ちまった!!!!」

光が慌てて跳び起きる。

「おはよう…」

「悪い里志…」

見張りが寝ちまって。」

「気にすんなよ…疲れてんだろ？
もう少し寝ていいぞ。」

「大丈夫だ。」

それより昨日の夜から考えてたんだ…。
奴ら、鐘の音と声が聞こえるさおりをイヴと言ったよな。」

「ああ…たしかに言ってたな。」

「じゃあ俺はなんなんだ？俺も鐘の音は聞こえたんだ。
俺も誰かの生まれ変わりなのか！！？」

「…んなこと俺もわかんねーよ。
まだ聞こえんのか？」

「いや……。
でも時々ひどい頭痛がするんだ…。」

「頭痛か…
それがなんにしても、
今はわからなくても、
いつかわかる日がくるんじゃないか？
今はさおりを救うことを考えようぜ。」

「ああそうだな…わりい。」

「ん…今何時？」

美樹が目を覚ました。

「11時ちょいすぎ。
何事もなかったよ。」

「そっか…光が見張りやってたおかげだね!!」

「ん、まあ…な。」
とぼける光。

その後、12時頃にはみんな起きていた。

残り時間4日。

12時35分”DG本部“

ウィーン

自動ドアが開き、ペガサスが中に入る。

部屋の中には仰向けに寝るさおりとドクターがいた。

「ドクター、イヴの状態はどうだ？」

「安定してますね。」

睡眠薬を打ってますのでまだ起きないでしょう。」

「よし。例の機械が出来るまでまだ時間がかかる。それまでは安静にしてもらわないとな。」

「例の防衛装置ですか…存在を消しても、奴らに勝てないのでは？」

「心配ない。」

イヴはパズルの1ピースだ。まだ他のピースがある。製作途中だがな…」

「まさか例の…！？

あれを復活させるのですか？」

「後にわかる！

それまで頼むぞ？」

「はい。」

「ふふふ！！

パズルは組み合わさることで意味を持つのだ。

そうだろ、イヴ…」

12時40分ビル5階

さおり救出作戦を話し合うがなかなかいい案は出なかった。

「うーん：難しいね。」

美月が頭を傾げる。

「1度奴らの基地の様子を説明するか。」

「教会の地下のエレベーターを通るとDG組織本館。しかし組織の規模がでかく、あちこちに監視カメラ。それに武器を持った軍隊がうじゃうじゃいる。慶の偵察した報告だと、教会前にも何名か兵士がいるらしい。」

「厳しいね…」

美樹もお手上げの様子だ。

「うーん…」

みんな沈黙する。

「こうなったら勢いで攻めるしかねえだろ？」

慶が呆れたことを言うので里志も美樹もため息をはいた。

そんななか、光だけ頷いた。

「いや、いけるかもしれない!!」

12月10日21時06分教会前

コツコツコツ：

教会の周りを2人、見張りが歩いている。
ガサ、ガサガサ！！

その前の茂みから教会を覗く慶と美月。

「ホントにこんな作戦でいいの！？」
美月がつぶやく。

「俺の作戦に欠点はねえ！！！」

「あんたのはただの自殺行為…
作戦考えたのは光でしょ？」

「どっちでもいい、
今は合図を待とう。」

合図。

さかのぼること1時間前：

「俺がでっけえ合図するからそしたら見張りを倒せ！！！」

「合図ってなんだよ？」

「すぐわかるって！！！」

しばらく待っていると教会の中から1人、別の兵士がやってきた。

「交代です…

俺1人で見張れとのことだ。」

「ああ、わかった。

それにしても一人で見張りなんて珍しいな？」

「全くですよ。

俺も一人は不安です。」

「まあ頑張ってくれ。」

そういつて見張りは二人教会の奥に戻る。

「見張りは一人だ…

これが合図か？」慶が茂みを出ようとする。

「ちょっと待ってよ!？」

おっかしい合図なんでしょ？これは違うと思う…」

美月の話に納得して茂みに戻った慶。

「光…早くしろよ!。」

その時だった。

ドーンという爆発音が聞こえ、教会の電気が全て消えた。

「何だ？何も見えないぞ…」
教会の中の兵士は慌てているようだ。

「これが合図かよ！！」
ずいぶん派手にやりやがったな。」

ジャリ…ジャリ…

見張りの兵士が近づいてくるのを感じた。

「今だ！！いくぞ美月！！」

勢いよく飛び出し、兵士に向かっていく慶。

ゴツッ！！

何かが当たる音がしたので、美月も出てみると
兵士に捕まった慶がいた。

「わりーしくじった…
こいつ強いわ。」
捕まりながら謝る慶。

兵士が銃を構え美月を誘導する。
「教会に向かって歩こうか。」

バツと非常用電気がつけられ、教会が元の明るさに戻る。

すると中からさっきの見張りが二人やってきた。

「どうした？そいつらは？」

「どうやら停電の犯人のようです。

ボスの元に連れていきます。」

そういつてエレベーターに向かう。

「待て！！そんな奴らボスに会わせるまでもない。
ここで殺す。」

銃を構える2人の兵士。

「ここまでかよ！！」

あっけねえな。」

あきらめムードの慶。

しかしそこに慶を捕まえた兵士が割って入る。

「何だおまえ。そこをどけ！！」

一緒に撃ち殺すぞ！！」

「彼らを勝手に撃ち殺す権利が、あなたにあるのですか？」

「なんだと!?!」

「勝手に人を殺したことがボスに知れたらまずいのでは?」

「た、たしかにそうだ…。」

徐々に焦りだす兵士。

「もういいですね?

こいつら連れていきますよ。」

その兵士は慶と美月を連れてエレベーターに向かう。

「待て!!」

呼び止める兵士。

「まだ何か?」

「お前は誰だ?

お前のような冷静で強いやつをみたことがない。

どの部署の兵士だ?」

「…………。」

「答えられないのか?」

チャキツ!!

兵士は銃を構える。

「俺の名前を知りたいのか……。」

兵士は慶を放し、マスクに手をかける。

パサッ!!

被っていたマスクが地面に落ちる。

「俺の名は矢吹光、神に背く男だ!!」

「光!!?」

慶と美月は驚く。

「ボスの言っていた危険人物、矢吹光か!?!」

兵士は銃を構え直す。

「無駄だ!!」

ゴンッ!!

ゴンッ!!

兵士2人は何かで殴られて倒れた。

「こんなうまくいくとはな…」

「ねっ!？」

里志と美樹がいた。

「里志!! 美樹!!」

慶が驚く。

「どーゆーこと？」

美月が光を睨む。

「いや、こういう作戦だったんだけど、

お前らに言うのと失敗しそうだから黙つといた。

特に慶には…」

光は申し訳なさそうに答えた。

「ひでえよ…」

慶が言った。

「こっからが正念場なんだ!!」

光が真面目に言った。

「正念場？」

「そう、こっからは俺と里志と美樹でこの服とマスクを付けて本館に入る。

敵を捕まえたってことで…」

「まさか俺らか？」

慶が言った。

「うん。」

「そしてペガサスに会って、さおりの居場所を聞いて救い出す。そういう作戦だ。」

「じゃあペガサスに俺らを引き渡すのか？」

「聞き出したら奴を倒す。その間に救い出す。それでおまえらも無事だ。」

完璧だろ？」

「どうだか…」

不安な様子の美月。

「大切なのはチームワークだ！！」
マスクを被り終えた里志が話す。

ウィーン

チンッ！！

エレベーターがついた。

「さあ、気を引き締めて行くぞ!!」

「なんだここ…エレベーターの階のボタン3つしかないぞ!!」

「1階、地下5階6階…。どこを押す？」

里志が光に聞く。

「俺らが1度行ったときは5階だった。5階に行こう。」

ピッ!!

5階を押す。

ウィーン…

ガチャッ!!

5階のフロアに出る。

兵士が1人こちらに向かって来た。

「上で騒ぎがあったようだな？」

その2人が犯人か？」

「はい。教会の発電機を爆破し、我々を襲おうとしたところを捕ま

えました。

今からボスのところに連れていきます。

ボスは今どこに？」

光がそいつに尋ねた。

他の4人はうまい聞き方だなあと、内心思うのだった。

「ボスならこの先の研究室にいたぞ。」

「…ありがとう。では失礼する。

ほら、さっさと歩け!!」

慶をドンと押す。

「後で覚えてろ？」

慶は小声でつぶやいた。

言われた道をまっすぐ進むと、研究室07と書かれた部屋があった。

コンコン

「失礼します。」

部屋に入るとペガサスとドクターらしい人がいた。

「おや？その2人は確か……」

「お知り合いですか？」

ドクターがペガサスに聞いた。

「ああ、イヴを連れて来てくれた人達ですよ。
3人足りませんが…」

「こいつらが、教会を停電させた犯人です。」

「なに？こいつらが…」

他にはいなかったのか？」

「は、はい。2人だけでした。」

光はそう言って慶と美月をペガサスの前に出す。

「くっ…」

「おい！他の奴らはどうした？あの矢吹光はどこだ？
前とは違う話し方でペガサスは言った。」

「……死んだよ。」

H I V Eにやられた。」

慶が言うとペガサスは笑い出した。

「ふふふ…そうですか。」

これで邪魔者はいなくなったわけですね。」

「あんたたち、さおりをどこにやったのよ？」
美月が聞いた。

「ん…まあいいでしょう。死ぬ前に教えてあげます。彼女は6階の
実験室にいますよ。
機械が出来たら死にますけどね…」

「このやろう!!」

てめえらは神なんかじゃねえ!!」

慶が怒る。

「我々は神の使いだ。

それにおまえらは今死ぬんだ。

おい…この場で射殺しろ!!」

ペガサスが光たちに命令する。

「誰も…」

光はつぶやく。

「ん…何を言っている?」

「誰も死なせやしない!!」

バツ!!

マスクを取る光。

驚くペガサス。

「お前は矢吹光…」

テーブルの銃に手を伸ばすペガサス。

パンッ!!

光が銃を撃つ。

テーブルの銃に当たり、銃が床に落ちる。

「……………」

ペガサスもドクターも黙っていた。

「変な真似すんじゃないよ。」

光が銃を降ろした。

里志たちがペガサスらを縛る。

「よし、6階に行くぞ。」

ガチャッ！！

研究室を出た5人。

「くっ…まさか矢吹光が生きていたとは…」

「どうするんです？」

「心配はいらん。すでに応援を呼んである。」

ウィーン

ガチャッ!!

6階に着いた5人。

「実験室はどこだ!?!」

「あった!! マップに書いてある。
左にいけばあるよ。」

急いで走る5人。

「さおり、待ってろ!」

数百メートル進んだところで、実験室イヴという部屋を見つけた。

ガチャッ!!

中に入る。

そこにはベットがひとつあり、さおりが寝ていた。

「さおり!!!」

光が駆け寄る。

「おい、さおり。

しっかりしろ!!」

何度もさおりを呼び、起こす光。

「んん…：光？」

「さおり。」

さおりは涙を浮かべた。

「光ー！！！」

2人は抱きしめあった。

「どうやってここに？」

「説明は後だ。逃げるぞさおり。」

部屋を出ようとする6人。

「おっとそこまでだ！！」

銃を持って、兵士が3人やってきた。

「死ね。」

銃を光に向ける兵士。

キンッ！！！！

ドアの近くにいた慶がパイプで銃をたたき落とす。

「つつ…！！」

後ろから兵士が次々と入ってくる。

「こんな奴ら楽勝だ！！」

ドカツ！！

バキッ！！

あっという間に光たちは兵士を倒す。

「大丈夫か、さおり。」

「うん。」

その時、ペガサスがやってきたことに光は気付かなかった。

カチャッ！！

銃を構えるペガサス。

「矢吹光、これでピリオドだ。死ね！！」

「光！！あぶない！！」

さおりが光の前に走る。

ズドンッ！！！！

目の前に血が飛び散った。

14…アダム

「死ね！！矢吹光！！」
ペガサスが銃を構えた。

「光！！あぶない！！」
さおりが光の前に走った。

そこで光はようやく事態を把握した。

「さおりー！！」
光はさおりの肩を掴み、包み込むようにさおりを抱きしめた。

ズドンッ！！！！

銃声が響き渡り、銃弾は光の背中に命中する。

床に血が飛び散った。

「さおり…無事か？」

「だ、大丈夫…」
さおりは何が起きたのか、わかんなくなっていた。

光は膝について、さおりに寄り掛かった。

「光…？」

「おまえが無事で…よかった。」

光は床に倒れた。

「光？」

ねえ…光…！！！！」

さおりは叫んだ。

里志や慶たちも光のもとに駆け寄る。

「おい、しっかりしろよ光！！

せっかく…せっかくさおりに会えたってのに死ぬんじゃねえよ！！
」

慶は泣いていた。

「おまえはこんなところで死ぬ奴じゃねえだろ！！

目を開けろよ！！？」

里志も叫ぶ。

美樹や美月も必死に光の名を呼ぶ。
しかし光は目を開けない。

「ふふふ……はっはっはっは!!!」
ペガサスは一人笑う。

「ついに邪魔だった矢吹光を殺した!!
この手で殺した…
神に背くからそうなるのだ。
はっはっは!!!」

一人笑うペガサスに慶が怒りを爆発させた。

「てめえ…
光を撃って何が楽しいってんだ!!
てめえは神の使いでも何でもねえ。
ただの殺人鬼だ!!!」

「貴様らも神に盾突く気か?
いいだろう。奴のように地獄に送ってやる。」

ペガサスは再び銃を構えた。

その時、光の意識はどこか別の場所にあった。

「思い出せ…」
誰かの声が耳に響く。

「自分が誰か思い出せ…」

俺が誰か？

知っているさ…

俺は矢吹光だ！！

その瞬間、目の前が真っ白に輝き、気がつくとも全体が白く輝く不思議な場所に立っていた。

「ここは…どこだ？」

辺りには何もない。

真っ白に輝くだけ。

「おまえは自分をわかってない…。」

突然後ろから声が聞こえ、光は振り返る。

そこには、とてつもなく大きく、圧倒されるほどのオーラを放つ不思議な人がいた。

白髭のおじさん。

一言でいうとそうなのだが、それだけではない、何か不思議な感じがするおじさんだった。

「あなたはいったい？」
光は聞いた。

「私が誰かは問題ではない。
今大切なのはおまえが誰かだ。」

「俺は矢吹光だ!!」

「違う：それは今のおまえの名だ。
本当の自分を思い出せ。」

男の言っている意味が理解できなかった。

「今の名前？」

本当の自分……？

訳わかんねえよ……!!」

「目を閉じろ……」

光は言われるまま目を閉じる。

その瞬間!!

頭の中をいろいろな記憶が駆け巡った。

あまりの記憶の量で、光にひどい頭痛が走る。

「うああああー!!!!」

少しして、頭痛は治まった。

「はあ…はあ…

い、今のはいったい…」

「本当のおまえに必要な記憶だ。」
男は冷静に答える。

「本当の俺って何だよ？」
光はついに聞いた。

「おまえは私の息子。
アダムの生まれ変わりだ!!」

「えっ…？」

俺が……アダム？」

「そうだ。

おまえは神の息子。

そして、おまえの使命はH I V Eを殺すことだ。」

「使命…？」

俺は……俺は化け物を殺すために生まれたってのかよ!!」

「そうだ。

おまえは今まで何体かHIVEを殺したな…

だが、おまえの力はそのなものじゃない。

もっと奴らを殺せ!!

命ある限り殺すのだ!!」

「ふざけるな!!

俺の使命だと?

俺はお前の言う運命など信じない!!

おまえが神で、今まで多くの人間の運命を弄んだだろう。

だが、俺は俺の信じる道に行く。

俺は神に背く男、矢吹光だ!!!!」

「私に刃向かうか?

後悔するぞ?」

神は最後の脅しをかける。

「後悔なんてしない。

大切な奴を守る…

それが俺の生きる道だ!!」

!!!!

光が叫んだ瞬間、辺りは真っ白に輝き、何も見えなくなった。

「悪いがおまえらもこいつのように死んでもらう。」
ペガサスが慶に銃を向ける。

「くっ…こんな奴に殺されんのかよ!？」
慶は下を向き、里志も動けず、さおりは泣き叫んでいた。

「助けてよおー光!！」

ドクンッ……

光の中に、アダムの血が流れるのを感じた。

ドクンッ……

俺は父親の言いなりにはならない。
俺は俺を信じる!!

ガバッ！！！！

光は起き上がり、慶の前に立つ。

「なっ…！！」

矢吹光…死んだはずじゃ！？」ペガサスは驚きひるんだ。

「悪いがな、俺はまだ死ねないらしい。
守るものがある限り、俺は生き続ける。
それがアダムの方なんだろ？」

光はペガサスに向けて笑った。

「まさか…まさかおまえがアダムか！！？」
ペガサスは後ずさりする。

その時だった…

ブー
ブー
ブー

サイレンが鳴り響き、赤いランプがついた。

「なんだ!？」

『緊急事態発生!!』

緊急事態発生!!

本館にHIVEが侵入…

A地点突破。

避難してください。

避難してください。』

「なに!？」

奴らにここを気付かれた? まずい……」

ペガサスは光たちのことなどお構いなしに外へ逃げ出す。

「A地点って、ここofすぐ近くだよ?」

美月が叫んだ。

「逃げよう!!」

6人は実験室を出る。

左側から銃声が響く。

「まずい…すぐそこにきてるぞ!!」

「エレベーターは…
右だ!! 右に走れ!!」

6人は必死に走る。

「ぐああああ!!!」

兵士がやられているようだ。

「まずいぞ!!」

6人から100メートルほど離れた位置で防御用の壁が降りて来ていた。

「あと数十秒で壁が完全に降りてきちゃう…
みんな急げ!! あれをくぐらないとアウトだ。」
光が走りながら叫ぶ。

ガタッ!!

壁は徐々に降りている。

「はぁ…はぁ…先くぐれ!!」
光がさおりを先に行かせ壁をくぐる。

続いて慶、美月、光とくぐっていく。

「いたっ…!!」

美樹が、5メートル手前で足をくじいた。

「美樹!!」

ほら掴まれ!!!」

里志が肩を貸す。

壁はもう閉まりそうだった。

「早くこい!!」

もう閉まっちゃおう…」

光が叫ぶ。

「はぁ…ほら美樹、くぐれ!!」

美樹は床に伏せながら、ギリギリ通れた。

「里志!!」

おい里志!!?」

ガシャン!!

壁が完全に降りる。

里志だけ間に合わなかった。

「わりい、間に合わなかった。」
壁の向こうから里志の声がした。

「わりいじゃねえよ!!」
待て、今開けてやる。」

光は力いっぱい壁を持ち上げようとする。

「ダメだ…あがんねえ。」

「なあ光…」
里志が呼ぶ。

「何だ里志…」

「美樹のこと、守ってやってくれ……」

里志の涙混じりの声が聞こえた。

「バカヤロー!!」
美樹はおまえが守るんだろ!？」
光も涙が止まらない。

「俺には……出来そうにない。頼んだ……」

「……………」

光は言葉がでなかった。

「美樹？ いるか？」

今度は美樹を呼ぶ。

「里志…。」

ここにいるよ、里志。」

美樹も大粒の涙を流す。

「美樹との約束守れなくてごめんな…
死なないって約束したのに……………」

「バカ！！」

どうしてくれるのよ！！

約束したじゃないの…

生きて、私と付き合おうでしょ！！！！」

「わりい。」

でも俺、美樹のこと大好きだ……………」

里志は泣いている。

「私だって大好きだよ…

こんなに好きなんだよ。

死なないでよ里志……」

「わりい……」

ホントにごめん。

お別れだ……」

「ギィヤアアア……！」

壁の向こうから奴らの声がした。

「みんな、楽しかったよ……！
おまえら死ぬなよ……！」

「里志……！！」

「……………」

壁の向こうから音が消えた。

「外に：外に出よう。」

光は涙ながらに言った。

エレベーターで教会に出る。

5人は泣きながら座り込んだ。

「私が転ばなかったら：」

美樹が責任を感じる。

「いや、里志は覚悟の上だった。

命をかけて、美樹を守ったんだ。」

光が慰める。

「でもなんでだよ：」

なんで奴らがこの時間にいるんだよ！！」

慶が疑問に思った。

「HIVEにかけられた呪いは地上で動けなくなる呪いだ。
地下なら行動出来るんだ：」

「里志………」

仲間がいなくなったやる瀬ない思いを抱えながら、5人は1度ビルに戻った。

ビルの中で休む5人。
一つだけ空いたままの席がいつもより目立っていた。

「戦おう!!」

光は突然叫んだ。

みんなが光を見る。

「里志がいないのはすごく悲しいよ……
でもあいつは、いつまでも悲しみに浸ってはほしくないって思っ
てんじゃないかな……」

「いつまでも下を向くな!!」
前見て生きなきゃ未来は見えないぞ
なんて……あいつ言いそうだな。」
慶が前を向いて言った。

「戦おう!!」

この戦いを終わらせなきゃ、何も変わらないもん。」
美月が立ち上がる。

「美樹…？」

里志のためにも生きなきゃ……」
さおりが美樹に手を伸ばす。

美樹は少しためらったが、さおりの手を握る。

「里志にもらったこの命、絶対に無駄にしないよ!!」
美樹は涙を拭く。

5人は里志の死を乗り越え、この戦いを終わらせることを里志に誓うのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5666h/>

EARTH THE END

2010年10月10日02時17分発行